
千なる彼方が六の鬼

上木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千なる彼方が六の鬼

【Nコード】

N4184Y

【作者名】

上木

【あらすじ】

地形や積み重ねた歴史が様々な怪異を呼ぶ街——江甲。驟雨の最中、休憩のために入った使われていないバス停で、刑部不比等は奇妙な少女と出会った。

その後も、探しても狙ってもいないというのに偶然の遭遇を繰り返す二人は、いつの間にか互いに、特別な何かを見出していた。

狂風が舞い、狂犬が嗤う。江甲に引き込まれる怪異を狩るために二人は手を組み、仕事を共にする決意を固めた。

雷鳴と共に

驟雨に見舞われた。

景色は熱気と雨粒によって薄白み、舗装されていない畦道が跳梁しているような錯覚を抱く。土が弾けているのだ。

スニーカー全体とチノパンの裾が泥だらけだった。ついさっきまで晴れ渡っていたから、傘も持つて来ていない。降り掛かってくる雫を一身に受けながら歩き続けた。

視界に広がるのは田園と雑木林。アスファルトもコンクリートも見受けられないこの景色は、些か時代の感覚を狂わせた。

夏の雨だな、と不比等は思った。全身は雨に濡れているが、寒くはないのだ。むしろ涼しいくらいで、汗を全て洗い流していった。

自分以外に人影など見当たるはずもない。曇天の下で、不比等は孤立している。

雨音が鼓膜を打ち続ける。それ意外には何も聞えず、視界も朧げだった。

ここまで雨に降られてしまっただう足掻いたところで何も変わりはない。不比等^{ふひと}は、投げやりな気分になっていた。傘を持っていない事を悔やむ気も失せている。

畦道を抜けて、少し広い道に出る。景色は相変わらずだ。車が通る事もあるらしく砂利道は真中が盛り上がり、削られている部分には水が溜まっていた。泥水を見るなどいつ以来だろうか、としばし考える。

霧がかかったような景色に不比等は視界を巡らせながら、右手に見える雑木林に足を向けた。確かあちらには古いバス停があったはずだ。

何かに化かされてでもしたらこういう気分なのだろうか。雑木林と田園以外には何もなく、夕立のおかげで視界は悪い。自分の住まう世界とは別な場所に迷い込んだ気さえしてくる。

華々しさはない、むしろ寂びている。しかし、不比等にはその景色が美しいと思えた。雨は激しく音を立てているというのに、不比等は大きな静謐に包まれているのだ。

不意に、異物が飛び込んで来た。田園も同じではあるのだが、人工物だ。木片を組み合わせて作られてた小屋のようなものが、雑木林を背にして黒々とした影となっている。

目的のバス停だと気付くのに、些かの時間を要した。日中、稀に通過するだけの道だ。少し環境が変わると、同じものがまるで違うものに見えたりする。

「今更、何も変わらないけどな」

一人呟きながら、不比等は小屋を覗き込む。

小屋は壁の一面だけを全て取り払い、街道側に口を広げていた。中には小屋自体と合一した木製のベンチがあり、座る事は出来る。典型的な田舎のバス停だった。

このバス停はもう機能してはいないはずだ、と不比等は思った。バス停が背を向けている雑木林の中に、古い山荘があったのである。そこを訪れる人のために作られたような停車場であった。山荘の閉館に伴い、バス停も放棄されたのだ。

屋根が雨を遮る。雷鳴をも伴い始めたそれは、しばらく止みそうにもなかった。

「まあ、たまにはこういうのもいいか」

ただ過ぎ去る驟雨をじつくり、他の物を一切断ち切って眺める機会などあまりない。花鳥風月を友とした覚えはないが、現代人がこういうものに憧憬を抱く理由は何となく理解できる。自然は非日常的な気配を含有しており、無意識にでも特別な何かを感じさせるのだ。

不比等はベンチに腰を下ろし、朧げな視界を巡らせた。

散歩のつもりで歩いていたら、ついつい遠くまで来てしまった。

不比等の衣服が吸い込んだ水滴が、ベンチの木を黒く染める。

子供の頃は、こうしてよく遊び回ったものだ。不比等にとっては

この田園風景が幼少の頃の記憶であった。

駄菓子屋で食料を買い込み、自転車を走らせてここまで来る。そしてしばらくは、自然の中を駆け回るのだ。その後に食べる駄菓子がたまたまなく美味しくて、たかだか百円の買い物で驚くほどに満たされていた。

あの頃から自分が遠退いたのか、あの頃が遠退いていったのか。束の間考えてしまう。

不比等はもう、二十二歳になっていた。

「先客がいるなんて。奇縁ですね、お兄さん」

突然の声に、不比等は弾けるように眼を向けた。

「びつくりさせました？ けどこっちもびつくりです、こんな夕立の中、使われてないバス停でくつろいでるお兄さんを見かけたんですから。最初は人じゃないのかと思いました」

そこには、小柄な少女がいた。座っている不比等と目線の位置が同じだった。

紺色のブリーツスカートに真っ白なシャツという清潔感のある格好が、どこことなく育ちの良さを垣間見せる。

「私も雨宿りなんです」

言いながら、少女は不比等から少し離れたところに腰を降ろした。不比等は適当な生返事をしただけだ。

本当に、妙なところで人と会う。周囲に民家は愚か、建築物の類いはほとんどない。あるとすれば、背後の雑木林の中にそびえ立つ古びた山荘だけなのだ。本来ならばこのような場所は田に関わりがある人間でもない限り訪れる事はほとんどない。

驟雨の終わりを待つ、刹那の奇縁であった。不比等を気にする風もなく、少女はベンチに深く腰掛けて雨を眺め始める。

「こんなところで何してたんだ？」

「それ、お兄さんが言える事じゃないです」

言いながら少女は微笑みを浮かべる。本当に、子供のような笑みだった。言葉や物腰がしっかりしているが容姿が幼いため、年齢が

いまいち読めない。

「俺は散歩の途中でこの通り、全身ずぶ濡れでな。今は休憩ってところだ」

ふと、不比等は違和感を抱いた。それがどこから発するものなのかは分からない。ただ漠然と、この少女は何かがおかしいと訴えかけてくる何かがある。

しかし、あまり不躰な視線を送るのも躊躇われる状況であった。人気のないこんな場所ならば、何が起きても警察を呼ぶ者はいないのだ。おかしいな誤解は抱かれたくない。

「私も、お兄さんと似たようなものですかね。ちょっと気になる事があつて歩いてたらこの通りで」

「災難だな」

「そうでもないです、雨は嫌いじゃないです」

少女は屋根から少し手を出し、雨に白い肌を晒す。そこで、不比等は自分が抱いた違和感の正体に気付いた。

この少女は、傘も持たずに雨の中を歩いて来て、僅かな水滴も浴びていないのだ。

不比等が座っている場所は水を吸い込んだ木が変色しているが、少女の周囲は変わらずに木目が浮かび上がっているだけである。

肌の白さも、それに相反する漆黒のような短い髪も、どこか人間離れしているように感じられた。

もしかすると、人ではないのかもしれない。ふと、そんな気持ちがある。

「幽霊を見たような顔、してます。私も、同じ気持ちですけど」

「俺が幽霊に見えるか？」

「ええ、とつても」

どこが、と少女は言わなかった。笑って見せただけである。ただその笑顔に害意はなかった。そして同時に、本物の笑顔でもないと思えた。

「私が本当は幽霊だって言ったら、信じます？」

「思いつく限りの質問を浴びせるかな。何しろ見た事がない」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら問いかけてくる少女は、幼い容姿に不似合いな妖艶さを孕んでいる。案外、思っているよりも年長なのかもしれない。

「なるほど、じゃあ私は人間という事においておいたほうが良さそうですね」

少女は首もとにあるネックレスを手で弄びながら喋っていた。古びた鍵という、少し珍しいトップだ。

不比等は、胸ポケットに手をつ込んだ。煙草が入っているのだ。雨を浴びてしまったが、まだ大丈夫だろうか。

湿気っているかもしれないが、構わずに火を点す。案外、煙草の箱は雨に強いと不比等は思っていた。

煙がたゆたう。白煙はゆらゆらと実体を掴ませず、不比等の目の前から消えていく。雨音の静寂の中へと紛れているのだ。

「幽霊、信じてますか、お兄さん？」

「信じてる」

不比等の迷いない言葉に、少女は些か驚いたような表情を見せた。しかしすぐに微笑へと戻る。

「なぜ？」

少しだけ語呂を漁った。思っている事を形にするのはなかなか難しい。

そうだな、と不比等は前置きをしてから少女の眼を見た。

「この江甲だけを見ても、牛鬼の慣れ果てと言われる怪物岩、無限に広がる地下世界、なんて民間伝承がある。心霊スポットなんて数え上げれば終わりが見えないだろうな。江甲みたいな半端な都市でさえそんな有様だ。これはもう、いないはずがない。世界を見渡せばそんな話はごろごろ転がってる。いないと頭から否定するには、あまりに多すぎるほどにな」

正直な気持ちだった。いないと頭ごなしに否定するには、あまりに数が多すぎないか。それは不比等が抱く純粋な疑問であり、答え

でもあった。火のない所に煙は立たない、という理論だ。

初対面の人間と妙な話題になったものだ、と不比等は思った。それも、このような奇縁が成せる業なのかもしれない。

頭のおかしい奴と思われるでも仕方がないような事を不比等は言っていたが、少女はそうは受け取らなかったようだ。頷きながら、ただ訊いている。

「けど実際に見た事はない？」

「ないな。大抵は人から聞いた話で、それはF O Fだ」

ふふ、と少女が笑う。そして、ぴつと不比等を指差した。

「お兄さん、やっぱり幽霊ですね」

「そうか？」

「道端で出会った女子高生に、自分の存在を認めてもらおうとしている可愛い幽霊です」

幽霊云々よりも、この少女が高校生であるという事の方に不比等は気持ちに向いた。確かに妙な色気は持っているが、それでもせいぜい中学生、運が悪ければ小学生呼ばわりされてもおかしくはない若く見えるというより、幼く見える。それは垢抜けなさから来ているものではなく、生来の容姿なのだ。

会話が途切れた。しかしその沈黙は不比等にとっては不思議と心地よいもので、無理に破ろうとも思えない。少女もそれは同じように、足を揺らしながら上機嫌そうに雨を見ていた。

雷鳴が奔る。曇天を切り裂く刃のようだが、雨が止む気配はない。残り三十分、と不比等は見切りをつけた。それでも雨が終わらなければ、濡れ鼠で帰る。

「……あつ」

少女が、何かを思い出したように声を上げた。

「用事が出来たみたいです。お兄さん、また縁があればどこか会いましょう。あと、ここから少し離れたほうがいいかもしれません」

「離れる？」

「それじゃあ、またっ」

少女が小屋から駆け出していく。雨を気にしている風もない。不比等はそれを止めるでもなく、ただ見送った。

変な女だったな、などと不比等は反芻しながら煙を吐き出す。

一瞬、夕立時に相応しくない爽やかな風が、頬を撫でた気がした。

雷鳴と共に（後書き）

初めましての方は初めまして、そうでない方はいつもありがとうございます。

趣味で創作活動をしている上木です。

この『千なる彼方は六の鬼』は初めての現代ファンタジーとなります。尚、一度連載を始めたのですが致命的なミスに気づき一度削除しております。再連載という形ですね。

今回は不定期連載となりまして、全体としては三部構成のつもりです。

最後までお付き合いくださるととても嬉しいです。

次に後書きを書くのがいつかは分かりませんが、何もなければ一部終了時点となるだろうと思います。

それではまた、よろしくお願いします。

奇縁

起居するのは白川だが、不比等はよく明窓の歓楽街に顔を出していた。江甲市唯一の盛り場であり、夜が深くとも人は多い場所だ。午前中の方が閑散としてるな、と不比等は思いながら喫茶店の一角で、煙草を銜えていた。人を待っているのだ。

周囲の客に眼をやると、その半分以上がカタギではないのが一目で分かる。目つきが普通の人間とは違う。ここはその手人間にとつては、馴染みの店の一つなのだ。

そういう店はいくつかあって、そこでは例え抗争中の組同士が鉢合わせてもハジく事は許されない。それが仕来りでありルールだった。

半分以上が裏社会の住人の中に、一見ただの青年でしかない不比等が混ざっているのは異様な光景なのかもしれない。不比等を知らない者は怪訝な表情でこちらを窺ったりしている。

不比等は極道ではなかったし、そうなる気もなかった。

ただ、死んだ父親が極道だった。その縁があり、今でも付き合いが続いているという形だ。父親の兄弟分がある組の若頭で、不比等自身が組長にも覚えが良かった。だから何かと眼をかけてくれるし心配もしてくれる。死んだ父親に対して唯一してやれる事、と若頭や組長が考えている事も不比等は知っていた。親代わりとも考えているかもしれない。だから、あまり無碍にも出来ないのだ。

今日、時間を指定してこの喫茶店に不比等呼び出したのは若頭の黒神だ。月に一度は顔を合わせて、金を受け取っている。父親の退職金を分割で息子に渡す、という形で生活費を支給してくれているのだ。本来なら母親が受け取るべきものだが、そちらももう死んでいる。不比等の両親は既に亡い。その他の親族は知らなかった。

不比等は、深く吸った煙を吐き出し、そのままソファに身体を深く沈めた。

無為に生きている。時々、どこからともなくそういう思念が頭を擡げた。何をするわけでもなく、何をしたいわけでもなく、ただ金を受け取って生きている。

普通の二十二歳の男ならば、もっと別な事をして必死で生きていても良いはずなのだ。しかし不比等は働きもせず、金だけが転がり込んでくる日々を送っている。

そして、その金を何のために使うわけでもなく、最低限の飲み食いなどに使った後は残していた。何のために残しているわけでもなく、使い道が見つからないだけなのだ。

そんな不比等を、周囲の人間は誰も責めようとしなかった。仕方ない事だと、揃いも揃って同情しているのだ。理不尽すぎる挫折を味わい、抱いた夢を打ち砕かれた。誰もがそう思っている。

陽光。窓の外だ。薄暗い喫茶店の中から、不比等はそれを見ていた。まるで自分の立場をそのまま映し出しているように思える。

自分は決して、この薄闇から出る事はない。そういう確信にも似た想いがあった。

「よう、不比等」

声に反応して、不比等は視線を店内へと戻した。煙草を揉み消しながら声の主を観察する。

紺色のスーツにネクタイという、筋者というよりはやり手のビジネススマンに見える男が不比等を見下ろして、無骨な笑顔を浮かべていた。不比等の父親の兄弟分であった、黒神だ。

黒神は不比等と向き合うように腰を降ろし、ウェイターに向かって丁寧な態度で「アイスコーヒー」と告げる。ヤクザは荒くれのイメージが強いが、実際は上に立つ人間ほど出来が良い。

注文の品が来るまでは、お互いに無言だった。不比等も顔を覚えている青年のウェイターがコーヒーを黒神に届けた時に、ようやく止まった時間が流れ出す。

「まずは、これだな」

黒神は懷から茶封筒を一つ取り出し、不比等に差し出す。不比等

はそれを頭を下げた受け取った。

口座への振込で済ませてもいいものだが、黒神が不比等の顔を見たいと言っているのだ。些細な事だが、それで兄弟分であった父親との繋がりに感じているのかもしれない。

「最近どうだ？ 何か変わった事はねえか？」

「特に。黒神さんも、身体は大丈夫ですか」

黒神も、若かった頃に受けた傷が多くある。

「俺の身体は大丈夫だな。兄弟のおかげだ」

不比等の父親と黒神は五分の兄弟分として、まだ若衆の頃から共にあったという。組内部の跡目争いで、不比等の父親は命を落としていた。おかげで若頭となった黒神や、現組長が恩を感じているのだ。

全盛期の父を不比等は知らないが、徒手空拳での格闘は右に出る者がいなかったと聞いた。殴ろうがハジこうが決して倒れず、流れる血を自らの力と変えているような男だった、と。

父親を語る黒神はいつも誇らしげで、それは威を借っているというより純粋な敬意から発せられるものだった。

「俺の心配をしてくれるのは嬉しいが、それよりも俺はお前が心配だぜ？」

「いきなり死んだりはしませんよ。残念な事に、健康ですし」

「そこまでは考えちゃいねえが、お前はふとした拍子に目の前から姿を消して、それ以来帰って来なくなりそうで怖いんだ」

黒神が煙草を取り出したから、不比等は火を差し出した。このような事をする必要はないと黒神は言うが、立場の違いははっきりさせておくべきだと不比等は思っている。黒神の気持ちはどうだろうと、不比等が下である事は間違いないのだ。兄弟分であり命の恩人の件であろうとだ。黒神はその辺りが甘い。というより、不比等に対してのみ甘い。

「その若さで世を捨てるつもりか？ お前が何をしようが、俺が生きてるうちは後押ししてやる。けどな、今のままじゃ勿体ねえぞ」

「自分でも分かりませんね」

「仕事だってお前にその気があるならいくらでも紹介してやる。真つ当な仕事だ、俺達には関わりがない」

「気持ちだけで結構ですよ、黒神さん」

「そうは言ってもな。俺はお前に、日向に出て欲しいんだ。このままじゃ腐るばかりだぞ」

いつも繰り返している会話だった。

言っている事は、黒神が正しい。言葉は優しいし黒神自身も齒に布を着せているつもりはないだろう。しかし本質的には、ちゃんと働いて真つ当に生きろ、という言葉に他ならない。

黒神は、唯一こうして不比等に「生きろ」と言ってくれる人間だった。その優しさが、不比等にとっては有り難く、同時に重い。

「正直、こういう事は言いたくねえんだが……」

「なんですか？」

黒神はコーヒーに口をつけて、言葉を切った。

「お前、極道になったらどうだ？」

これは初めての言葉だった。

不比等は黙したまま、じっと黒神の眼を見つめる。裏社会に生きている人間独特の光と、鋭さを持った眼だ。

生半可な気持ちで言っているのではない。それはすぐに感じ取れた。

「お前も兄弟の血を継いで、やっぱりスデゴロの達人だ。それに頭も良い。度胸と頭があれば、昇っていけるぜ」

後押しするように黒神が言う。しかし、不比等にその気はなかった。黙って首を横に振る。

「そうか。まあ、そうだろうなあ。いいよ、これは今回だけだ。二度と言わねえ、忘れてくれ」

「はい」

人の上に立ちたいと思った事はなかった。金が欲しいと思った事もない。情熱を持っていた頃は、ただ自分のやりたい事をやり続け

たいという欲求だけで動いていた気がする。

「お前ら親子の生き方はまあ、揃いも揃って刹那的だよ。見たる側からすりゃ、本当に危うい。何でそんなところでって場面で薄氷を踏もうとする。自分の命なんてどうでもいいとばかりにな」

「父もそうでしたか」

「そうだった。それで、その薄氷を踏む時——いや、どんな時でも決して、誰かのために動いちゃいなかった、あいつは。自分がやりたいからやる。それだけだ。そのくせ義理には厚い。人情は皆無だが。ほんと、親子は似る」

そういえば昔、父と黒神が兄弟盃を交わしたきつかけは、父が黒神を助けたからだと言いたような気がする。どういう経緯かは知らないが、命を救われたという話だ。

黒神は溜め息をつき、「この話は終わりだ」と言わんばかりに煙草を灰皿で揉み消した。そして、懷に手をつ込む。投げ出すように、写真が一枚、テーブルの上に置かれた。

「これは？」

「誰だか分かるか」

早雲学園の制服を来た女子生徒と、その母と思しき女性が映っている写真だった。不比等はそれを手に取り、記憶を探る。

不比等も早雲学園の出身だが、既に二十二歳だ。高校生だった頃は最低でも五年前という事になる。不比等が卒業してから制服は一度変化を遂げているため、どう考えても同じ時間を学校では過ごしていない。母親らしき人物に至っては、この年齢の女性の知り合いが不比等にはいなかった。まず該当するものはない。

友達の友達などだろうか、と不比等は思った。そこでふと、昨日会った少女の顔が浮かぶ。しかしすぐに消えた。たまたま会話でFOFという言葉を出しただけなのだ。

「見覚えはありませんね。制服を着ている子はとても真面目そうですし、俺との接点はないでしょう。この女性に至ってはまず……」

「そうだろうな」

苛立たしげに、黒神はまた新たな煙草を銜える。今度は不比等が火を差し出す前に自分で点けてしまった。

「問題があるのは、この娘の方だ。俺の娘なんだよ、姫乃って名前だ」

「黒神さんの？　へえ、可愛いですね」

「だろう。俺じゃなくて母親に似た」

写真をもう一度手に取り、よく観察する。確かに、黒神と似ている箇所は見つからなかった。

それに、黒神姫乃は写真で見える限り、一つとして非行の形跡が見当たらないのだ。至極真つ当な生き方をしているように、不比等の眼には映る。

「とても良い子に見えますが。お世辞なんかじゃなくて」

「ああ、良い子だ。俺を反面教師にしているし、それでいいと俺も思っている。こんな世界に入って来て欲しくない。だが、その娘が一週間前から行方が知れねえんだ」

「家出ですか？」

「分からない。今までそういう気配を見せた事は一度もないと嫁は言ってる。俺もそう思ってる。大体、一週間連絡無しに姿を消すなんて、高校生としちゃ普通じゃねえ」

確かにその通りだった。この様子だと恐らく学校にも行っていないのだろう。

失踪、と不比等は心の中で呟いた。同時に、大きな鼓動を感じる。理由は分からないが、自分の中に眠る何かが雄叫びと共に目覚めつつあるような予兆が、全身を駆け巡った。

「黒神姫乃……」

不思議な衝動を抑えながら、不比等は黒神を見た。その表情に不安はないが、どこか悔悟のようなものが垣間見える気がした。

女子高生の家出ならばよく聞く話だが、真面目な女子生徒がそのようなツテを持っているとは考え難い。完全に姿を消すという事はどれだけ難しいか。ましてや姫乃の姓は黒神なのだ。深く潜るには、

その姓は邪魔である。

しかし同時に、誘拐や殺人などの事件とも、不比等は繋げる事を躊躇った。黒神なのだ。カタギで生きているが、極道の身内なのだ。直接、そうと知って手を出すのはまともな神経ではない。

極道は警察ではない。その戒律は厳しく、組長が黒だと言えば白いものも黒くなる。そして何より、警察には取れない厳しい処置を、極道は取る事が出来る。集団として、いくらでも手段を持っている。赤の他人ではなく若頭の娘。事と次第によっては死人が出る事態だった。

「もう、手は回してるんですか」

「可能な範囲でな。親父も必死になってくれてる」

黒神の言う親父とは組長の事である。ヤクザの組長と組員は、親と子なのだ。

「これは個人的な頼みだが――」

「なんです？」

「お前にも、搜索に加わって欲しい。俺達と足並みを揃える必要はねえから、自由に探してくれ。見つけてくれりゃちゃんと労いはする」

報奨金のようなものを既に黒神は用意しているのかもしれない。言外に、最悪の事態も想定していると伝えられているような気がした。

面白そうだ、と口にこそ出さないが不比等は思った。ただの家出で偶然それが続いたのであれば金だけを手にすればいいし、そうでなければ何かしらの展開があるはずだ。その展開こそ、不比等が期待するものだった。

「お世話になりっぱなしですし、俺も可能な範囲で調べましょう。期限はありませんよね？」

「特に切つてない。それにしても、口だけでもそう言えるのが、お前が兄弟よりも利口な点だ。じゃあ、またな」

黒神は伝票を取り、振り返る事もなく支払いを済ませて店を出て

行った。こうして不比等には会いに来たが、本当に会いたいの娘の姫乃なのだろう。

写真が、テーブルの上に残されている。手がかりはこれだけだった。ただ不比等には、早雲学園出身という身分がある。学校に、卒業生として入るのは難しくなかった。黒神もそれを期待したのだろう。

しかし、失踪者として探す事は出来ない。姫乃の両親が学校に事実を告げて、警察に届けを出していたとしても、誰とも知れない男が嗅ぎ回っているのは逆に不比等がお縄を貰いかねないのだ。

「これ吸ったら行くか……」

不比等は車のキーをテーブルに放り出し、煙草に火を点けた。涼しい店内を最後に味わっておきたいのである。

コインパーキングに停めた車は、今頃地獄と化しているだろう。

*

不比等の車は、黒色の大型ワゴンである。四角いボディが特徴的な、ワゴンの中でもかなり大きな部類だ。

車は大きい方がいい、というのが不比等の信条であった。ただ単に積載量が多いからという理由なのだが、買ってから後悔はしていない。便利なものである。

不比等は車を停めて、ハンドルにもたれかかりながら前方へと視線をやっていた。早雲学園の校門である。

こうしていると、女子高生を狙う犯罪者に見えなくもない。車種も車種だ。いつもは停まっていけない車に、校門を出る生徒の一部も不審な眼を向けている。

あまり細かな事は気にしなかった。教師が呼ばれて出て来たら、適当な事を言つて誤摩化せばいいだけだ。

時代の移り変わりを感じる。不比等が通っていた頃とは制服が違ふのだ。男子はネクタイが変わったくらいだが、女子はスカートが紺色だったものから赤のチェックと緑のチェックの二種類に変わった。

校門から出て行く生徒を一人一人確認しながら、不比等は黒神姫乃の写真を胸ポケットから取り出した。

「まるで探偵だな」

自嘲気味に呟く。しかし、こういう何かしらのトラブルに関わっている時こそ、不比等は楽しいと思えた。

言ふなれば非日常。失踪も、誘拐も、殺人も、日本という法治国家に生きる者にとつては日常ではないし、あつてはならないのだ。

ほんの少し、不比等はその非日常に近い場所にいた。父親の存在が大きいが、不比等もまた、かつては素行の良くない学生であつた。刹那主義とも言ふべき思想、生き方。時々の快楽を優先し、危険に身を晒してこそ生きていると思える。その衝動は、幼少の頃、田園や雑木林で棒切れを振り回していた時に感じた欲求と似ていた。そういう血だ。

父の言葉を思い出す。口癖のようなものだった。あまり家にいない父だったが、時折不比等を見かけてはその言葉を口にした。

黒神の不安は、不比等が父と同じような末路を辿る事なのだろう。今のままでは、いずれ近いうちに命を落とす。極道として、非日常に身を置いている者の直感が働いているのだろうか。

「死んだら死んだで、なあ」

校門から、野球部らしき集団が出てくる。ランニングにでも行くのだろうか。不比等は部活をやっていた事がないため、よく知らず知りたくもない。

坊主頭の一団の後ろに見覚えのある人影を見つけたのは、煙草に火を点けたのと同時だった。

赤色のチェックのスカートに白いシャツ。リボンもきつちりと身につけていて、楚々とした様子の少女。誰といるでもなく一人で、紺色のスクールバッグを抱えていた。

黒神姫乃の件で話を訊きたい人間ではない。しかし不比等は車を降りて、校門の方へと歩み寄っていた。野球部員達が視線を向けてくるが、それはどうでもいい。

少女も近づいてくる不比等に気づき、しばし眼をしばたかせた後に笑顔を浮かべ、駆け寄ってくる。

「本当に縁があるみたいです、幽霊のお兄さん」

「そうらしい。まさか早雲学園の生徒だったなんてな」

夕立の中、無人のバス停で居合わせた少女だった。頭頂部が不比等の胸の辺りにある。光を浴びて、真つ黒な髪に照り返していた。背は女として見てもかなり低い。

見上げるようにして、少女は不比等をまじまじと見ていた。

「お兄さん、今は幽霊じゃないです」

「白昼の往来だからな。そう見たくても見れないだろう」

「そういう意味じゃないです、よ？」

少女は言いながらスクールバッグを漁り、古びた鍵がトップになっているネックレスを取り出した。学校の中でつけていては没収される危険があるから、忍ばせていたのだろう。

慣れた動作で首の後ろに手を回し、留め金を引っ掛けている。それをつけた時、少女の顔に少し安堵が浮かんだように、不比等には見えた。

「それで、何か学校に用が？ それとも私を待っててくれたりしたんです？」

「どっちでもないな」

少女は笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。それが本物の笑顔かどうかは、相変わらず怪しいものだった。少なくとも不比等には、本物の笑顔には見えない。

「あんたを見かけたからつい出て来たが、本当は別の奴に用がある。

悪いな、止めちまって。行ってくれ」

不比等は手を振って車に戻ろうとした。別に用事があったわけではないのだ。しかし少女はそれを遮るように、くるりと回って不比等の前に立つ。

それを避けて不比等は無言で車の扉に手をかけたが、そうすると少女が不比等の手を掴んでいた。

「何だ」

冷たい手だった。夏の突き刺すような日差しを浴びている事が信じられなくなる。

「せつかくだから——」

「悪いが、あんたにしてやれる事はないんだ。してもらう事もない。呼び止めておいて何だがな」

「まだ言い切つてないです」

少女が、不満げに頬を膨らませて見せる。ふざけてやったつもりだったのだろうが、その仕草がよく似合っていた。それほどに、この少女の容姿は幼い。しかし同時に、奇妙な妖艶さも持っている。

「私、江甲に来てまだ短いんです。案内してくれる人とか欲しくて」「学校の友達にでも言えよ。見ず知らずの男を頼るなぞ正気の沙汰じゃない」

「お友達が欲しいんです。人見知りでして、きつかけがないとなかなか」

「きつかけは学校で探してくれ。俺はそこまで暇じゃないし、暇であつたとしてもあんたに割く時間はないんだ」

汗一つ流さず、少女は涼しげな表情で不比等に笑いかけてくる。不意に、全てを見透かされているような気分に襲われた。笑顔の仮面の下で、何処までも冷静に不比等を観察している少女の姿が、見えたような気がした。

「……ああ、何だ」

不比等は溜め息をつき、助手席側に回って扉を開いた。

「とりあえず、座つてくれるか。涼しい場所にいたい」

「そうですね、それは私もです」

飛び乗るようにして、少女は不比等の車に乗り込む。スクールバッグを足下に置いたのを確認して扉を閉めて、不比等も運転席側から乗車した。

空調のおかげで車内は涼しい。頭上からの日光も屋根に遮られて、焼けるような熱気も消えていた。切り取られた空間に入ったせいで余計に、外が夏なのだと感じられる。

「クーラーというのは人類が生み出した名器です」

「まったくだ」

ずっと銜えていた煙草を、灰皿に突っ込む。そしてまた、校門から出てくる生徒の選別を再開した。もしかしたらもう帰ってしまっているかもしれないが、校門の出入りが下火になるまでは続ける。

「お兄さん、何か良い事ありました？」

それを知ってか知らずか、少女は昨日と同じように言葉をかけてくる。

「そう見えるか」

「見えますね。昨日とは違う眼をしていますよ。宝くじでも当たったのかと」

「宝くじが当たらずとも金には困ってないな」

少なからず生き生きしているとすれば、それはきつと黒神姫乃の失踪に関わっているからなのだろう。しかし他人から見ても分かるほど、自分は楽しんでるのだろうか。

他人の不幸を喜んでるわけではないはずだった。ただ単純に、非日常を呼び込もうとしてる。その先にある生き甲斐に近い何かを探り当てようとしている。

少女は不比等と同じように校門を見ながら、合わせた膝の上に両手を置いていた。妙に行儀の良い女で、それが様になってもいる。

「贅沢な話です。お兄さんの歳でお金には困ってないなんて。何か悪い事でもしてるんです？」

「どうだろうな」

この少女は何を聞き出そうとしているのか。興味を示しているのは分かるが、それはどこに向けられた興味なのか。不比等にはそれが分からなかった。

「死人みたいな眼をしてると思ったら、次の日には期待に眼を輝かせてる。不思議な人です」

「俺にとつてはあんたが不思議でならない。こうして執拗に絡んでくる理由が分からないからな」

「奇縁が大好き、ただそれだけです。少なくとも、当たり前に出会って当たり前に分れる人よりは知りたくなります。違いますか？」

年齢にしては不相応な、自我を確立した少女だ。この年頃の子供は大抵、集団意識の中に埋没しながら己の個性を頑に主張する。やりたいようにやっているつもりで、結局は何一つとして出来ていない。

そういう虚仮威しや虚勢を、この少女からは欠片も感じなかった。唯一、仮面のような微笑みだけが、虚心ではないのだ。

「もしかしたらお兄さんは私の運命の人かもしれないし、誰かの仇かもしれない。はたまた生き別れの兄か、もしかして弟とか。実は私のお父さんは実の父ではなくて、本当はお兄さんが父だった？」

虚空を見ながら、少女は捲し立てるように言う。

「それで、本当のところは？」

「赤の他人です」

少女は楽しそうに笑い、鞆の中からペットボトルに入った紅茶を取り出した。温くなっていたらしく、少し口に含んで顔を顰めている。

この少女が変わり者なのは間違いない。それに昨日は気付かなかったが、言葉の節々に聞き慣れないイントネーションが入っているのを不比等は聞き取った。本当に微かなものだが、これは英語を公用語としていた人間によくある訛りだ。

日本育ちではないのかもしれない。となると、この江甲にはいつ来たのだろうか。英語の癖が抜け切っていないところを見ると、案

外最近の話なのか。

「……私の日本語、変です？」

不比等がじつと少女を見ていたからか、微笑のまま少女が問いかけてくる。

「何も間違っちゃいない。ただ訛りが残ってるって程度だよ。どこ
の育ちだ？」

「丁寧語は、苦手です。私にとって日本語のお手本は母だったので、
母の喋り方が一番得意かも。生まれは……そうですね、東南アジア
と言って間違いはないです」

東南アジアと言っても広い。尤も、日本の生まれではないと知れ
ただけで充分ではあるが。日本という島国が、その他か。日本人で
ある不比等はどうしてもそういう捉え方をしてしまう。

少女の容姿は、かなり日本人に近い。髪や眼も黒々としていた。
しかしその端正な容姿には、少なからず他の血を感じなくもなかつ
た。それはアジアの血というよりは、欧米の血である。

「初めて、私に興味を持ちましたね、お兄さん」

そういえばそうだ、と不比等は思った。今までは少女の話を聞き
流しているだけな節があった。知りたいと思い質問を投げたのは、
今が初めてだろう。

他人を知りたいと思った自分が、少しだけ苛立たしかった。その
気持ちを押し込めて、不比等は煙草に火を点ける。

「けど、よく私の訛りが分かりましたね。自慢じゃないですけど、
学校の友達はみんな私を生粋の日本人だと思ってます」

不比等には、少なくとも普通の高校生以上の英語に対する知識や
経験はあった。外国人を相手にする事も多い仕事をやっていた頃が
あったからだ。喋れなければ話にならなかった。雇っても貰えない。

少女の言葉には答えず、不比等はただ校門へと視線を注いだ。野
球部の集団はとうに姿を消し、もうまばらに人が出て来ている程度
だ。

「アテが外れたか……」

明日また来よう。そう思ったところで、明日は土曜日である事に気付いた。早雲学園は基本的に週休二日だ。

搜索は来週まで先延ばしにするしかないのだろうか。周囲の学生を捕まえて聞き込みをするのもありかもしれないが、可能な限り避けたい事態だ。余計な疑念は抱かたくはない。

「人を探してたんです？」

少女は不比等がなぜここにいたのかを察したらしく、状況に相応しい質問を投げかけてくる。

「そうだ。群雲って知ってるか？ 群雲鏡って名前なんだが」

「ああそれなら、お友達です。転校してきたばかりの私に、声をかけてくれました」

不比等は自分の間抜けさに呆れた。この少女は早雲学園の生徒ではないか。何で最初に尋ねなかったのかと、自分でも不思議になる。心のどこかに、この少女との奇縁の残滓があるのかもしれない。

それが、少女との関係を特別なものとして考えさせたのか。ただの先輩と後輩ではない、と。

「本当に、とことん縁があるみたいだな。連絡先は知ってるか？」

「私は知ってます……けど、鏡と知り合いなのに、お兄さんは連絡先は知らないんです？」

「鏡の兄貴と、俺は知り合いだったんだ。だから妹の鏡と直接連絡先を交換する必要性を感じてなかった」

それならばなぜ兄を通さないのかという顔を少女が作るが、不比等は無視して「連絡を取ってくれ」と言った。

携帯電話を取り出す少女を傍目に、不比等は車のアクセルを踏み込む。ついでなのだ、この少女は家まで送って行き、群雲鏡と落ち合えばいいだろう。

「お兄さん、名前は？」

「刑部不比等」

「不比等ですね」

鏡に説明するために、名を訊いたのだろう。なぜ呼び捨てなのか

束の間考えたが、すぐにどうでもよくなった。呼び方などどうでもいい。

少女は携帯電話を耳に当てながら、ネックレスの鍵を手で弄んでいる。

「私は乙矢響子です。覚えておいてください」

そういえば、今までお互いに名乗ってすらいなかったのだ。不比等にとっては奇妙な出会い方をした少女であり、乙矢にとっても同じようなものだったのだろう。

名を知った。契約を交わしたような気持ちに、不比等は束の間陥った。知らないままであれば、きっと三度目に会う事はなかっただろうと思える。

「日本人みたいな名前だな」

「私はとても気に入ってます」

ここで別れても、また必ずどこかで会う。奇妙な確信を抱きながら、不比等はハンドルを切った。

*

群雲鏡は、色白で背の高い少女だった。不比等は幼い頃から鏡を知っており、その成長過程はよく覚えていた。鏡は不比等にとって、友人の妹だったのである。

今の鏡に、かつての面影はない。眼は光りと落ち着きを失い、深い隈が張り付いていた。顔色も白いというより青く、明らかに健康を害した者の容姿だった。

豹変ぶりに驚いていないと言えは嘘になる。不比等が最後に見た鏡は、人懐っこい少女だったのだ。

「久しぶりだな、鏡」

「……はい」

鏡は挙動不審で、不比等は少なからず驚きを隠せない。不比等の家から最寄りとなる喫茶店の一角は陰鬱な雰囲気醸している。その中でただ一人、乙矢響子だけが笑顔を浮かべて鏡の隣に座っていた。

家まで送っていいとしたが何かと理由をつけて、乙矢は着いた来た。不比等が根負けした形である。

「びつくりしました。響子ちゃんと不比等さんが知り合いだったなんて」

鏡の声は消え入るように小さい。不比等は注意して言葉を一つ一つ拾い上げた。

「鏡、何か嫌な事でもあったのか？」

「いえ、大丈夫です。それで、私に用事って……？」

こういう答えが返ってくるのは分かっていた。突如として、数年ぶりに現れた兄の友人。そんな男に気軽に話せるような内容ならば、人の面貌はここまで変わらない。

同時に、不比等はまたもや強い衝動を感じていた。黒神姫乃の失踪を聞いた時と、同じだ。一瞬だが、鼓動が高鳴る。

「大丈夫なら、それでいいが」

自分の感じた何かを抑えるように、不比等は適当な言を發した。

乙矢に「期待に眼を輝かせている」と言われたばかりでもある。

「不比等？」

乙矢が催促してくる。なぜかこの少女は、言葉は丁寧だというのに名を呼ぶ時だけは呼び捨てだった。

乙矢はさつさと用件を聞きたいのだろう。鏡と合流する前から一緒にいた乙矢にも、なぜ鏡を探していたのかは語っていない。

「鏡、黒神姫乃を知っているか？ 確かお前を同じ二年生だったと思うが」

「……同じ、クラスです。最近休んでて会えてないけど」

不比等はテーブルの上に、黒神姫乃の父から受け取った写真を取り出した。それを見て、鏡は頷く。この人物で合っているという事だ。

「姫乃ちゃんに、何かあったんですか……？」

「失踪した。家族も居所を掴めていない状況だ。鏡は、姫乃の家庭事情を知ってるか？」

あまり言いふらすべき事ではないが、鏡に関しては口止めしておけば大丈夫だと不比等は判断していた。尤も、元来の性格が変わっていないければだが。

友人の失踪。良いニュースとは言えない。鏡はショックを受けるかもしれないが、何があったか知らないが、今の鏡は憔悴している。

だが、不比等の予想に反して、鏡の表情はそれほど変わらなかった。それどころではない、という感じなのだ。

「お父さんがヤクザだって、聞きました。姫乃ちゃん、あんまり人に言うべきじゃないと思ってて、信頼できる人にしか言っていないそうですね……」

親が極道。それだけで、姫乃には余人に窺い知れない葛藤があったのだろう。不比等は少しだけ、それを理解できていると思っていた。不比等の親もまた、極道であったからだ。

いっそ親が極道だと言い回って威勢を張れるような性格ならば楽だろうが、写真を見る限りそういう側面は見えて来ない。真面目な女子高生でしかないのだ。

「姫乃はどんな人物だった？ 鏡の主観でいい」

「真面目で、勤勉でした。とにかく頭の良い子で、私にもよく勉強を教えてくれましたし」

およそ写真の通りと言っている。人は見かけによらないと言うし確かにそういう事もあるが、多くの場合はやはり容姿にその人物の何かが出るものなのだ。黒神姫乃もその例には漏れていないらしい。「失踪する直前に、何か変わった様子は？ 妙に覚えている事とか、

「何かないか」

「えっと、ですね……」

ただでさえ丸まっている背中を更に丸めて、鏡は自分の膝あたりへと目線を落とした。憂いを帯びた表情が陰り、本当に別人のように、不比等には思えた。

「うーん？」

考えている鏡を傍目に、乙矢が興味深げに黒神姫乃の写真を覗き込んでいた。手に取り、近づけたり遠ざけたりしながら何かを見ようとしているようだ。

「どうした、乙矢」

「響子って呼んでもらっていいです？」

「何か映ってるか」

乙矢の顔に不満が過る。

「……ぎゃおー」

爪を立ててはいるが、どこまでも無気力な、形だけの威嚇だった。無視した事に拗ねてみせたのだろうが、無駄に可愛い反応に不比等はどうつつこんだものか束の間考えた。

「ぎゃおーじゃない。それで、何か映ってるか」

「いいえ、何も。ただ見ていただけです」

笑いながら、乙矢はマジシャンがランプを消す時のように写真を撫でた。それに何の意味があるのかは分からないが、テーブルの上に戻ってきた写真を、不比等は懷に仕舞い込む。

「それで、鏡。何か思い出せたか？」

「最近、笛を初めて聞いた、すごい。いつもと違うと言えば、そのくらいでした。後はいつも通りで……何もありません」

「笛？」

乙矢が、反応を見せた。笑ったままだが、眼を見開いたのだ。少しだけ、素を晒したように思える。だが、何が興味を惹いたのかは分からない。

「江甲城公園で、笛を吹いてる人がいたんだって。ギターで弾き語

りしてる人とかはたくさんいるけど、笛はちよつと珍しいんだよ」
鏡が、乙矢に分かるように説明を始める。

江甲城公園は、中甲区にある観光誘致のために作られた江甲城の麓にある広大な公園だ。城自体に歴史的価値はなく、従って公園にもそういう付加価値はない。ただ広い公園というだけだ。

江甲という土地の真中に、何の意味もないただの城を建てる意味が、不比等には分からなかった。

観光誘致が建前であつたが、その広い公園を目当てにした家族連れが週末に訪れていたり、若者のダンスチームがいたり、鏡が言うように弾き語りをする者ばかりだ。観光スポットとしては不出来もいいところである。

「確かに何か見れる場所ではあるな。それも無料で」

「そうなんです、不比等？」

「知らないのか？」

「響子ちゃんは江甲に来てまだ短いです……」

鏡の言葉に付け足して、江甲に来たのは学校の夏休み明けに合わせて、と乙矢が言う。つまり、まだ一週間程度だという事だった。それならば江甲城の事情を知らないのも無理はない。

「あそこは芸を披露したい奴にはいい。広くて土地は余りまくってる上に、公園と城しかないから多少の騒音は誰も気にしない」

言いながら、不比等は一週間という期間に引っかけりを覚えていた。黒神姫乃が失踪して一週間。乙矢響子が江甲に来て一週間。一致しているのだ。

何も乙矢が犯人だなどとは言うつもりはないし、思ってもいない。ただ何となく、心に残ったのだ。

こういう引っかけりは、案外どこかへと繋がっている。少なくとも、不比等はそう信じていた。違和感は偶発的な本能ではなく、積み重ねた経験から弾き出される必然なのだ。ただ全貌を見るまで、本人もそれに気付けない。

「不比等さんは、姫乃ちゃんを探して……？」

「ああ、姫乃の父親に頼まれた」

「そうですね……姫乃ちゃんは、学校では単なる体調不良という扱いになってます。私も、黙ってたほうがいいですよ」

「そうだ、人には言うな。探そうとも思うな、おかしな事に首を突っ込む可能性もある。あと、紙とペンをくれ」

不思議そうな顔で、鏡が鞆から筆箱とメモ帳を取り出した。

メモ帳の空白のページに、無造作に選んだ黒のボールペンで不比等は自分の電話番号を書き込んだ。

「何かあったら、連絡をくれ。絶対に自分からは動かないでくれよ、あくまで偶然、耳にした物事を教えてくれればいい。学生の噂するのは、回るのが早いからな」

人の繋がりは無限である。どこから何が漏れてるか分かったものではなかった。こうして校内に網を一つ張っておくのも悪くはない。いくつか手を打っておき引つかかったところから探すのが妥当だと、不比等は考えていた。駒から先に揃えてしまうのだ。状況に合わせて駒を作っている間は間に合うものも間に合わない。

「ありがとう。鏡、時間取らせて悪かったな」

もう聞ける事はない、と不比等は判断した。

帰ろうと腰を上げかかり、不比等は窓の外に眼を向けた。もう日が落ちているのだ。

「鏡、乗って帰るか？ 乙矢、お前も家の場所さえ言えば届けるが」

「いえ、私は近いので大丈夫。失礼します……」

鏡はそそくさと立ち上がり、そのままぺこりと頭を下げ、早足で喫茶店を出て行く。

何があったのだ。不比等は考えながら、伝票を手を取った。二年前は、あのような少女ではなかった。もつと闊達で、人が好きだったはずだ。それが今では屈託を抱え、人を恐れているように見える。

「最近、夢見が悪いつて言っていました、鏡」

「事情を知ってるのか？」

「いえ、知り合ったばかりの私は深く聞いてないです。鏡は黒神

姫乃ほど深刻だとは思えませんが、人の面貌をあそこまで変える悪夢。相当なものです」

ぱんぱんと、音を立てて乙矢がテーブルを叩く。座れ、と言外に示しているのだ。

仕方なく、不比等は乙矢と向き合うように腰を下ろした。満足げに笑顔を浮かべる乙矢は携帯電話を取り出し、何を言うでもなくボタンを押し始める。

次の瞬間、不比等の携帯電話が振動した。

「不用心です。こうして盗み見られて、個人情報が漏れるかもしれないですよ。」

「目敏い奴だな……」

鏡のメモ帳に連絡先を書いた一瞬で、番号を記憶していたのだらう。

「まあ、鏡の悩みは数日中に解決すると思います。大丈夫」

「何だ、やっぱり詳しく聞いているのか」

「いえ、女の勘です」

笑顔に全てを隠す。それが乙矢のやり方しかかった。真意がまったく読み取れず、不比等はただ聞き流した。

時々、乙矢は不思議な事を言う。不比等が幽霊に見えると言ったり、バス停から離れると言ったりだ。日本育ちではない故の思考かとも不比等は考えたが、そういうわけでもなさそうだった。単なる性格なのかもしれない。

「それにしても、どうにも分かりません。不比等は、鏡が心配です？ それともどうでもいい？」

乙矢が、思いついたように話題を変えた。

「気に掛けてはいるけど、何かしようとは思ってない。強いて言うなら、待ってるように見えます。鏡が持ってきてくれるかもしれない、何かを」

「あいつが何を持ってくるんだ」

「それは私では何とも言えません。けど、不比等はそんな感じに

見えます。姫乃の一件も、鏡の抱えてる問題も、自分のための何かを見つける道具です」

「他人のトラブルを求めるほど、性格は悪くないつもりだ」

言いながら、否定は出来ない、と不比等は思った。

鏡を心配する心がないわけではなかった。蒼白な肌も、落ち着かない眼も、尋常ではない何かを抱えている者のそれなのだ。

一方で、鏡に具体的な「救済」を施さなかった自分がいる。何かあったのかと聞いただけで、食い下がりはしなかった。氣遣う言葉も投げなかった。

心のどこかで、今の鏡に回復されては困るという思念が脈打っている。

間違はなく、自分は待っているのだ。その実感は日々強くなる。無気力に生きながら、漠然として姿も捉えられない何かを、ただ待ち焦がれている。

黒神姫乃の一件でもそれを感じていた。そして同じ可能性を、群雲鏡にも感じている。

ほとんど衝動と言ってもいい、非日常に憧憬を抱く心。

「最初から思ってたけど、良い人じゃないです、不比等は」

「真つ当で良い人なら、働きもせずただ金だけ転がり込んでくるような生活はしてない。望んでもそんなツテがない」

雄飛、とでも言えればいいのか。

乙矢の言葉によって、姿の見えなかった自分の衝動が少しだけ形を持ち始めていた。

大きく人生を変える一手だ。それは社会的に大成するなどというものではなく、不比等の望む人生を歩めるという意味である。

自分の望む人生とは。不比等にはそれが分からない。非日常を求める欲求も、刹那的な思考も、終着点が見えないのだ。

「俺は、何を待ってるんだろうな」

呟いていた。乙矢は相変わらず笑いながら、嬉しそうに頷く。自分の言葉が認められたと思ったのだろう。

「不比等みたいな人は、時々見ます。ただ大半は、自分が大器晩成だと信じて疑わない愚か者です。所詮は外的要因を求める無能」

「世界を変えたいなら自分が変われ、だな」

「そうです。ただ稀に、本当に向こう側から誘いがないと入れない世界もあるんです。自分だけじゃどうにもならない、そういう世界」
自分は、鍵を持っているのだろうか。固く閉ざされた扉を開く鍵を。不比等は乙矢の胸元を見ながら、そんな事を考えた。ネックレスのトップが、古びた鍵なのだ。

「また、おかしい話になっちゃいましたね。どうにも、不比等といるとその手の言葉が出ます」

「そういえば、最初に会った時は幽霊がどうのって話だったか」

「です。不比等はほんと、変な人です」

「お互い様だ」

笑った。初めて、乙矢に向けてまともな笑顔を見せたかもしれない。
い。

少しだけ、乙矢が驚いたような顔をしていた。乙矢が笑っていない所は二度目だな、と不比等は思った。

狂犬の牙

速く、ただ速く。不比等の心にあるのはそれだけだった。

気、というものがあるとすれば。それは、集中力と言い換える事が出来るのかもしれない。

人間の集中力が本当に持続するのは三秒だという話も、三十分だという話も不比等は耳にした事があった。そしてそれは、いずれも間違っていないと思う。個人差があり、向き合う事象によって消耗は増減する。

そして人は、その時間が切れたからといって完全に弛緩するわけではない。再び、その気を紡ぎ直すのだ。

何かに熱中しており、一時間や二時間があつという間だったという事がある。人はその間に一度か二度は、余所見をするだろう。本人も気付かぬような余所見だ。それが、気を紡ぎ直す瞬間である。

そこを突く。その瞬間、人間はまったくの無防備なのだ。

不比等は踏み出し、拳を相手の顔面に叩き込んだ。訳も分からず、男は自分が打たれたという事にも気付かず、倒れていた。

「てめえっ」

「騒ぐな、屑が」

使われていない廃ビルの地下であつた。外まで声は届かない。元々はカラオケがあつたらしく、内装の多くはそのまま残っていた。

不比等はそこで、七人の男に囲まれていた。いずれも、不比等と年齢はそう変わらないだろう。

「奥に女がいるだろ。俺はそいつに用がある」

黒神姫乃の行方を探るうちに浮き上がって来た場所の一つが、ここであつた。

不比等は、姫乃の失踪を意思によるものとは考えていない。姫乃は外側の力によって、強引にどこかへと連れ去られたと考えた方が自然なのだ。

「女なんかいねえよ」

「そうか？　じゃあ確かめさせろ」

「お前には関係ねえだろ」

「それは俺が決める事だ」

頭と思しき男が、不比等に向かって凄んでくる。言葉も掛けずにいきなり一人殴り倒し、乱入した。その後向き合った男を更に一人沈めている。それが効いているのか、相手は腰が引けていた。

「いいから、どけ。お前らをパクらせたいなんて思っちゃいない。

奥にいる女にお前らがした事にも、俺は興味がねえ」

「女なんていねえって言っただろ！」

初動。一步踏み出し、上体を大きく逸らす。そのまま、脚を振り上げた。不比等の蹴りは、そのまま最前列にいた男を吹き飛ばす。死んだように動かなくなったそれを見て、残った六人は怯懦をはつきりと見せ始めた。

「必死で俺が進むのを阻止しておいて、いない？　何かあるのは明白だろうが、屑共が」

「な、何なんだよあんた」

「答える理由があるか」

言いながら、不比等は最初に沈めた男の鼻を踵で打ちつけた。痛みで覚醒し、悲鳴を上げながらのたうち回る男を睥睨する。鼻の骨くらいは折れているだろう。

「あんたは、俺が質問に答える理由があると思うか？　答えてくれよ、おい」

もがき苦しむ男の腹に二度、三度と蹴りを入れる。確かな感覚が、不比等の脚には残っていた。

「どっちが上かも分からない馬鹿ばかりだ。そう思うだろ」

執拗なまでに、同じ場所を蹴り続ける。男が動かなくなっても、話しかけながら不比等はそれを止めなかった。

泣きながら、仲間の一人が不比等に縋りついてくる。それで、不比等は初めて足と止めた。

「分かった、通してやるから！ だから止めてくれ！」

「ああ、それはどうも」

「俺達が悪かった、だからもう……」

泣きながら、頭らしき男が腰を落とす。本当に危ない人間に会ってしまった、という後悔、恐怖が渦巻いているのだ。

もうどうしていいか分からない。このまま生きて帰る事も危うい、という思いが男から生気を奪う。

「まあ、当然の権利として奥は確認する。それと、お前らも無事で帰れると思うなよ」

絶望とは、この事だ。

謝ったからといって必ず許されるわけではない。泣いたから手を止めてもらえるわけでもない。この連中に限らず、多くの人間はそれが分かっている。

謝ったのだから許されるはずだ。悲しんだのだから助けてもらえるはずだ。誰もがそのように考えて生きているのだ。

甘い、と不比等と思う。自らの行動に対する対価を、見返りを、無意識のうちに求めている。

「ほら、さっさと行けよ」

不比等は半分死んでいるような状態の男に、更に蹴りを浴びせた。醜悪な泣き顔のまま、覆い被さるように頭の男が庇う。

「運べ、奥にだ」

「そんな」

「早くしろ」

無傷のままの男達が、必死に倒れている三人を運ぶ。カラオケの最奥の部屋だ。そこから、異臭が漂ってきている。

「開ける」

嚴重に、鎖と南京錠で扉は閉じられていた。震える手で、一人がその南京錠を外して鎖を取り払った。

扉が開かれる事で、異臭はより強くなった。

生臭く、汚い。それだけで、不比等はこの部屋で何が起きていた

のかを察した。この香りは、血液のみで発生するものではない。

奥に転がされている人の形をした何か。不比等はそれを、人ではないものとして見下ろした。眼は死んでいて、不比等が入って来ても僅かに身じろぎをしたただけだ。

しゃがみ込み、髪を引っぱって顔を確認した。

「違うな」

黒神姫乃ではない。まったく別の女だ。ここで陵辱の限りを尽くされていたとなれば、父親である黒神の怒りは相当なものだったろうが、アテが外れた。

何となく女の全身を確認すると、腕にいくつもの注射跡が残っていた。

「女をクスリ漬けにして、お前らが犯すのか。獣以下だな」

女の様子や部屋を見るに、もうこの女は遊び尽くされた後なのだろう。備品であったソファや壁には、女のものと思しき爪が突き刺さっている。

禁断症状に苦しんでいるのだ。この世のものとは思えぬ程に悶え苦しみ、死んだように眠る。それを繰り返している。

だから、この男達も監禁していた。

「た、頼むから警察には」

「金次第だな」

男達に、安堵の表情が過る。不比等はそれを見逃さなかった。

姫乃以外の女の安否など、今の不比等にとってはどうでもいい。放置したまま、部屋を出た。男の一人がいそいそと鎖と南京錠で封をする。

普段はカラオケの通路にあるソファでたむろしているらしく、不比等はそこの真中に腰を下ろした。胸ポケットから煙草を取り出すと、遠慮がちに一人が火を差し出してくる。

「お前ら、いつもこんな事してるのか」

「いつもってわけじゃないです。あの女が、初めてです」

「楽しいか？」

「別に、楽しいってわけじゃ」

返事をしていた男の股ぐらを、全力で蹴り上げた。倒れる男は顔から血の気が引き、痙攣しながら苦しんでいる。

その男の額で、不比等は煙草の火を消した。

少しでも、相手は気を許そうとした。不比等には許すつもりなどないのにだ。それだけで、殺す理由にもなる。不比等はそう考えていた。

男達は人数も多く、体格が不比等より良い者がいた。たった一人の不比等など、本来は恐れる対象ではないだろう。不比等は容姿も敵つくはない。

ただ一点、容赦のなさ。不比等はそれで男達を圧倒していた。ここまで逡巡なくやれば、大抵の人間なら不比等を恐怖する。それは、不比等の器を遥かに上回る恐怖となる。影に怯えるのだ。

「それで、いくら用意できるんだ」

次は自分かもしれない。そういう思いが、次々に男達を襲う。財布をひっくり返して、不比等の前に次々と金が置かれた。

ぱっと見たところ、十万前後といったところだ。

さっきの女を、不比等は思い浮かべた。これはつまり、あの女の命の値段なのだ。

たった十萬円の命。日本という国においては、あまりに安い命だ。このような命、あつてないも同然である。学生のアルバイトでも、一ヶ月あれば稼ぎ出せるだろう。

だが、事実そうなのだ。あの女の両親にとっては、数千万を積まれても手放せない価値ある娘だったのかもしれない。しかし不比等にとっては、この男達にとっては、十萬円の価値しかない。

いや、不比等にとっては、一円の価値もない命だ。

「つまらねえな。そうだろ、たったこれだけの金で、女の一生を買いえちまうんだ。あの女の人生はこれからどうなる？」

「それは」

金的を食らわせた男の股ぐらを、踏みつけた。そのまま、不比等

は無造作に力を込める。

何かを潰した感触が、しっかりと足裏に刻まれた。

聞くに堪えない悲鳴がビルの地下を引き裂き、黙らせるように不比等は口に爪先を突っ込んだ。

踏みつける。歯が明後日の方向へと頭を向け、血が溢れ出す。不比等のスニーカーが、僅かに血で汚れた。

「おい」

「はいっ」

不比等が顔を向けた一人が、直立する。もう、抵抗しようなどという考えは浮かびもしないのだ。

「俺が、義憤に駆られてこんな事をしてると思うか？ あの女への仕打ちを見て、俺が怒ってるんだと思うか？ 正直に答えろよ」

問いかけた男は眼を泳がせ、必死で言葉を探している。不比等の暴力が飛んでこないように、ない頭を振り絞っている。

「そうは見え、ないです……」

不比等は声を上げて笑った。男達の顔が引き攣る。本当に狂っていると思ったのだろう。

男の言う通りだった。不比等にとってはあんな女の人生も命も、どうでもいい。それこそ犬に食わせても何ら不満のないものだった。あの女がどこで死に果てようが、不比等の関与するところではない。あの女には、恩がない。助けてやる理由がない。義憤などという感情は、昔から持っていなかった。

「お前はなかなか面白い奴だな。よし、殺せ」

不比等は、睾丸を踏みつぶされて悶えている男の口から足を引き抜き、指差した。

「勘弁してくださいっ」

「殺せば、お前だけは助けてやるよ」

「すみません、本当にすみませんでした！」

「俺は謝れなんて言っただろ？」

そろそろ帰ろう。不比等はそう思いながら、土下座して謝り続け

る男の後頭部に向けて、脚を踏み下ろした。

やられる。そう思ったのか、男の身体が強張った。だが不比等は、少し頭を撫でる程度に留め、背を向けた。

差し出された金は放置したままだ。元よりあのような汚れた金を受け取る気もない。

カラオケの入り口を開き、階段を登る。廃棄された雑居ビルの地下であり、目撃される事はあまりない。所有者は何をしているのだろう、と少し考える程度だった。

ビルを出ると、そこには明窓の歓楽街が広がっていた。さっきまでの惨劇など見る影もなく、いつも通りの賑わいが、この場所にはある。

夜の街を、不比等は行く当てもなく歩き出した。人混みに紛れて流れに任せるのだ。居酒屋の呼び込みが多いが、無視していれば、喧噪の中にも一定の静けさがあつた。

歩きながら、不比等は漠とした思考を巡らせた。

今回の件も、黒神姫乃ではなかった。監禁されている女がいる、という噂を知り合いを伝つてとにかく集めたのだ。

手当たり次第に歩き回っていた。場所自体を突き止められない事も多く、突き止めても別件。それがもう五件ほど続いている。探し方を変えた方がいいのかもしれない。

しかし、黒神姫乃の通う高校、早雲学園からは情報がない。知人である群雲鏡に頼んでおいたが、反応はいまいちなのだ。鏡と会つてからもう、三日が経過していた。

普通の女子高生が、どこへ消えるというのか。不比等は再度、歩きながら可能性を検討した。

不比等が、姫乃の友達などをあまり探らないのには理由があつた。そのような生温い姿の消し方ならば、すぐに話に拳がるであろうし、そもそも両親が「家出の可能性はない」と言っている。その言葉がどこまで信じられるかはともかくとして、不比等にもただの家出だとは思えなかった。写真を見た瞬間から、この娘はそのような事と

は無縁だと感じられたからだ。そういう直感は、今まで信じながら生きてきた。

何かがあった。非日常的な何かが、姫乃を襲った。そう思ったからこそ、不比等は搜索の一端に加わる事を引き受けたのだ。

不意に、太腿の辺りが振動した。携帯電話が鳴っているのだ。

不比等は人混みから抜けて、道の端へと寄った。ディスプレイを確認すると『群雲鏡』と表示されている。

「はい、刑部」

「あ、不比等さんですか」

「ああ、そうだ。どうした、何か分かったか」

電話の向こうから聞こえてくるのは、間違いなく群雲鏡の声である。不比等の友人の妹であり、搜索中の姫乃が通っている早雲学園に同じく席を連ねる高校生だ。

不比等は鏡に、姫乃に関する噂があったら教えてくれ、と頼んでいた。

「いえ、その、逆なんです。今のところ何もありません。すってお知らせです。何も連絡しないのもあれかと思いましたが……」

「そうか。ただ、周りの連中は気にし始めてるんじゃないか」

週が明けてもクラスメイトがいない。友達がいない。そろそろ疑念を持ち始めてもいい頃だろう。

「何でいないのか、という話をしてる友達はいます。けど、虚偽を問わずに行方についての話は出てきてません、私の知る限りですけど」

「だがもう一週間以上経つ。そろそろ、鏡の耳に入っていないだけでおかしな噂は立ち始めてもおかしくはないんだ。これから、いつそう注意しておいてくれ」

「はい、分かりました」

鏡の声は、相変わらず疲れている人間のそれだった。しかし、不比等の言った事はしっかり覚えており、遂行もしてくれている。

『それと、その……』

鏡が口ごもる。何か言い難い事があるのだろうか。不比等は黙って、次の言葉を待った。

『この間は、久しぶりに会えたのに、あんな様子でその……すみません』

「ああ、それなら構わない。いきなり押し掛けた俺も悪かった」

数年振りの再会だったが、確かに鏡の様子はおかしかった。眼は落ち着かず、顔色も極めて悪い。言葉も弱々しくて、聞き取るのに苦労したのだ。

しかし、本当に言いたい事はこれではないな、と不比等は思った。言葉を発する瞬間に、僅かに声色が翳りを帯びた。これは、言いたい事を言えなかった人間によくある。

「それで、本音は？」

言えないなら、こちらから引き出せばいい。背中を押す形でも作ってやれば、人はすらすらと喋ったりするものだ。

『あ、いや……その』

「怒ったりはしねえよ。なんだ、俺が怖いかな？」

『怖いって、人はよく言っていました。私はそうは思った事はないんですけど』

それは、友達の妹だからだ。赤の他人に対しては驚くほど冷たいのは、不比等自身でしっかりと自覚している。例外もあるが、それは極稀である。

『質問が、あるんですけど』

「遠慮せずに言え」

『響子ちゃんとは、どうやって知り合ったんですか……？』

意外な質問だった。不比等の中で、具体的に何か予想があったわけではない。しかし、まさか乙矢響子の事を訊かれるとは思ってもなかったのだ。

不比等は自分の中で言葉を探した。何と云っていいのか、いまいちわからないところがある。

辿々しくとも、正直に答えたところで、何か不都合があるわけで

はない。しかし、不比等はそれを躊躇った。余人にはあまり言いたくない、と心が働く。

『今日、ちよつとだけ響子ちゃんに訊いてみたら、笑うだけで教えてくれませんでした』

「そうか」

よくよく考えてみれば、乙矢響子は赤の他人にも関わらず、不比等は普通に接していた。それどころか、興味さえ持った。

陵辱を尽くされ、おまけにクスリ漬けにまでされた女をついさつき、放置してきた。情の一片さえ抱いていないのだ。自分はそういう人間だと不比等は思っている。

乙矢と対する時の自分は、何かが違う。言葉を探しながら、不比等は乙矢の事を思い出していた。

驚くほど小柄で、ほんの少し英語訛りのある日本語を操る少女。古い鍵をトップにしたネックレス。笑顔で全てを隠して、本心を見せない。

奇縁であった。驟雨の廃バス停で偶然、出会うはずもない出会いを遂げた。それが、不比等の心に引っ掛かる。この少女は、特別なかもしれない。そういう思いが、頭を出す。

そういえば、乙矢も同じような事を言っていた。

「質問を質問で返して悪いんだが、どうして気になる？」

『それは……内緒、ですけど』

「じゃあ俺も内緒でいいか。乙矢の奴から聞いてくれ」

そうですか、という悄気た声が受話器越しに聞こえる。不比等自身にも、話をしない理由など分からなかった。強いて言うなら、乙矢との出会いの意味を知るまで、胸に秘めておきたいといったところか。

何か意味があるというのか。考えた後に不比等は自問したが、その答えも出るはずがない。

「ああ、鏡。代わりと言っちゃ何だが、力になれる事があつたら俺に言ってくれ。この間のお前は、どう見ても異常だった」

前に会った時に言いそびれた言葉だった。いや、言う気などなかったのだ。ただ今は、交換である。答えない代わりに、少しだけ手を差し伸べておく。

『ありがとうございます。けど、大丈夫です。最近ちょっと夢見が悪くて、寝つけないだけなんですよ』

「それならいいんだが。夢見が悪いじゃ済まない顔色だったから、ついな」

『いえ、気を遣ってもらえて嬉しいです。それじゃあまた、姫乃ちやんの事があつたら連絡しますね』

「ああ、待ってる。よろしく頼む」

電話を切って、不比等はポケットに押し込んだ。周囲を見渡し、身体を伸ばす。

今日の搜索はこの辺りで終わりだ。これ以上探したところで何も出て来はしないだろう。車を置いているコインパーキングまでも、そう遠くはなかった。

*

見知った人影が視界を横切ったのは、その直後だった。

不比等はそちらに眼をやり、正体を探す。角を折れるようにして、それは消えた。

「噂をすれば、か。本当に、縁のある奴だ」

不比等は無造作に歩き出した。影の後を追う形である。時刻はもう午前一時だ。明日も学校があるというのに、こんな時間まで歡樂街をうろついているとは。

とんだ不良少女だな、と不比等は呟いた。人混みをかき分けて角

まで到達すると、その先の角をまた折れる影があつた。
ゆつたりと歩く。次にその影を見たのは、水路に降りる梯子だつた。

「おいおい、こりゃいくら何でも意味不明だな……」

江甲市における最大の見所は、その街並である。

江甲は水都なのである。ほとんど資料は残っていないという話だが、江甲という土地は過去に行われた大規模な治水工事によって、凄まじい規模の水路が縦横無尽に街中を駆け回っている。

それはどこでも見かける溝などとは大きさが違う。とにかく深く、深い。そんな水路が、右を見ても左を見ても、必ずどこかにあるのだ。

この明窓の歓楽街のみが例外で、その水路のほとんどに蓋をしていた。しかしその他の土地では、様々な水路が街中を奔っている。個人の土地の内を流れている事も少なくはない上に、家庭で普通に使われている。

家の一軒一軒の前には必ず水路にかかる小さな橋があり、水路は堀のような役目も果たしている。橋の造形も、家によって様々だった。

水路と橋の街。それが、江甲なのだ。

しかしさすがに、水路は交通路としては使われていない。このような時間に、一人で水路に降りて行くなどただ事ではなかった。

不比等は後を追うようにして、そのまま梯子を滑り降りた。足首あたりまでが水に浸かる。

水音があちこちから聞こえてくる。水路内は薄暗く、音が反響しているため影が駆け去った方向があやふやにしか分らない。

不比等は西へと歩き出した。歓楽街下の水路は、まったく灯りがない。となれば、そちらから離れる形に進むのではないか、と思つたのだ。

水路は、真中に深い水が流れている。その両側には、地上の道路で言う歩道に当たる部分だが、浅瀬が用意されているのだ。

この水路は、かなり古くから存在していたという。現代においては、その上澄みを補強して使っているという話だった。

不比等も実際、幼少の頃に探検と称して進めるだけ進んだ事があるが、水路は下へ下へと広がっていた。そして、途中からは岩壁がむき出して木材で補強されているのを見ている。行き止まりは、子供の足では到達できなかった。

夏でなければ、このような水路に足を踏み入れる気は起きないだろう。不比等は額に浮かぶ汗を拭った。

大人一人が充分に動き回っても余裕がある水路。このようなものが街中に、しかも地下にまで及んでいる。もし地震で崩れるような事があれば、江甲という街は巨大な落とし穴にでも嵌まったような形になる。

水路のおかげで公共の交通機関の整備は進まず、ほとんど電車がいない。地下鉄など夢の夢だ。江甲では、バスとタクシーが主に利用されている。

「ああ、そういえば……」

不比等は思い出して、ポケットにある携帯電話を取り出した。この間、盗み見た番号で乙矢がこの電話に着信を入れている。それにかけ直せばいいのだ。

呼び出し音を聞きながら、不比等は立ち止まった。無作為に歩き回っても仕方がない、と思えてきたのだ。

コールは続く。しかし、乙矢が電話に出る気配はなかった。舌打ちしながら、不比等はポケットに携帯電話をしまう。

それと、同時だった。

轟音。不比等の身体を強烈な旋風が打ちつけ、水の中に倒れ込んだ。少しだが、突風で身体が浮かんだのだ。

何事だ。不比等は身体を起こしながら、姿勢を低くして風が吹いてきた方向を睨みつけた。

あの風を、俺は知っている。

ふと、そう思った。どこかで、俺は一度あの風を感じている。

何処でだ。俺は、何処であの風を浴びた。必死で記憶を探った。そして、思い出した。

次の瞬間、興奮と共に不比等は走り出した。

高笑い。それをどうにか抑えていた。今にも、声を上げて笑いそうになる自分がおかしくて、また笑いそうになる。その繰り返しだ。待っていたのはこれなのだ。故もなく、不比等には確信だけがあった。俺はこれを、ずっと待っていた。声を上げて、その喜びを表現したい。

血が騒ぐ。それは月並みなものではなく、まさしく全身が沸騰するような滾りだった。意思だけでなく、身体もこれを求めているのだと不比等には感じられる。

水路はどんどこ地下へと進んでいる。しかし巧妙に光りを取り込む作りになっており、そこまで暗いとは感じない。明窓の地下から離れれば、水路内もそれなりに明るいのだ。

不比等は更に足を速めた。この先に何があるのかなど分からない。ただただ、期待に胸を躍らせていた。

再び、風。吹き抜けて行く。不比等の行く手を阻むような突風だった。

姿を見たのは角を折れた時だ。

原型は人間だろう。しかし異常に発達した前肢と顎、そして衰えた後肢。後肢はほぼ使われていないのか、前肢で身体を引き摺るようにして疾駆してくる怪物。全身は鱗のようなもので覆われており、黒々としてた。大きさは、不比等の三倍近い。

不比等はずいに、笑っていた。これでもかというほど高く、声を上げて笑う。これほどに笑った事が、生まれてから一度でもあっただろうか。

肌がびりびりと震える。何が何だかさっぱり分からないが、あの怪物は自分を殺そうとしている。それだけがはっきりと、感じられる。

怪物。突進してくる。不比等は、それを横に飛び退く事で避けた。

くると身体を丸めて回転し、再び立ち上がる。

怪物は反転し、不比等を睨んだ。

交差する時に確認したが、尻尾があった。そして、腹のところに一つ、大きな傷がある。何かで斬られたような跡だ。

「これは……！」

言葉が上手く出て来ない。自分を殺そうとする怪物にぶつける感情は、歓喜以外の何物でもなかった。

ようやく、本気になれる相手が出て来た。本気で壊せる相手が現れたのだ。

突進。怪物の殺意は不比等に痛いほどぶつけられる。笑いながら、不比等はその懷に潜り込んだ。滑るようにして、腹の傷跡を狙う。ぶつかった。刹那、不比等は跳ね飛ばされる。コンクリートの壁に背中を打ちつけられ、一瞬呼吸ができなくなった。

四つん這いになる不比等に、怪物は追い打ちをかける。異常に発達した前肢を叩きつけたのだ。

成す術もなく、不比等は水の中へと沈められる。胸が潰されそうだった。いや、このままならば確実に潰される。

手を伸ばした。傷口。手を突っ込み、全力で引き裂く。怪物が、咆哮を上げながら不比等を解放した。

後退はしない。不比等は這うように前へと進み、両手を傷跡に突っ込んだ。奇妙な感覚が両腕を包み込む。それにも構わず、全力で傷口を押し広げる。

咆哮ではない、これは悲鳴だ。痛覚があるのだ。ならば、さつきビルで痛めつけた連中と、人間と同じで、この怪物は殺す事が出来る。

また、不比等は弾き飛ばされた。薙ぎ払われたのだ。今度は真中にある深い水路に落ちたが、すぐに昇って足のつく深さの場所へと出た。

「俺は頑丈だろ？ 昔からそれだけが取り柄だからな、簡単には殺せねえぞ」

語りかけていた。怪物の眼には知性の光などなく、到底言葉を解するとは思えないが、それでも不比等には語りたい事が山ほどあった。

豪腕。風を切る。不比等の頬を掠める。退かず、前に出る。握った拳を、怪物に突き出す。狙いは眼球だ。

奇妙な感触だ。生温い何かが拳を覆う。そして、全身に何かが奔る。

血。吹き出していた。何の血だ、と不比等は思った。

食い込んでいる、牙。

「俺の血か……？」

眼球を潰されながらも、怪物は不比等に食らいついた。何とか頭から丸呑みにされるのを反射的に避けたが、肩口から胴が、巨大な顎に覆われている。

鮮血。腹、胸、肩、首。次々と異物が食い込んでくる感覚が、不比等を席卷する。

「そつだ、殺せ！ 早く殺せ！ やってみろ！」

言いながら、笑っていた。笑いながら、不比等も突き出した拳を退かない。眼球から、体内へと至る。我慢比べだった。

血が流れる。なぜか、力が湧いてくる。

瞬間、突風が水路を駆け抜けた。水が巻き上がり、視界に映るものが錯綜する。何が何だか分からない。ただ、牙が抜けたのだけは確認していた。

水が治まった時、不比等を食らっていた怪物は数メートル先でもがいていた。何かに吹き飛ばされたのだ。

「あんだ、何してんのよっ！」

怒声が頭上から飛んでくる。それで、自分が倒れている事に不比等は気付いた。

起き上がり、顔の水を拭う。何度も転んだせいで、全身がずぶ濡れだった。

「不比等、何でここに……！」

「とことん縁があるな、乙矢」

「傷だらけじゃない！ ああもう、今夜はトラブルばかり……！」
喋り方、表情、態度。全てが、今までの乙矢響子ではなかった。
制服を着ているという点以外、まるで別人である。

分かつてはいた。分かつてはいたが、やはりあの乙矢の態度はポーズに過ぎなかったのだと実感させられる。笑顔で、巧妙に自分を隠していた。

そして別人のような乙矢を、不比等はすぐに受け入れていた。

「乙矢」

「何よ」

「ありがとう。俺はやっと、生きられそうだ」

こんな時に何を、と乙矢が閉口する。しかし不比等は、それ以外に言葉が見つからなかった。

不比等に非日常を齎してくれたのは黒神姫乃でも、群雲鏡でもなかった。乙矢響子だったのだ。礼を言わずして何を言えばいいのか、不比等には分からない。

「何でもいいわ。とにかく、逃げる」

「何でだよ、こんなに面白いのに」

「馬鹿なこと言わないで」

咆哮。不比等と乙矢は、別な方向へと飛び退いていた。その真中を、怪物が通過していく。

「あれの名前は？」

「いいから早く——」

「名前は？」

「……穢鬼よ。もう、どうなっても知らないから」

穢鬼。不比等は呟いて、その名をしっかりと頭に刻み込んだ。その後、なぜか生まれた時から知っていたような気分に襲われる。本能的に知っていた何かが、やっと顔を出してくれた。そういう感覚だった。

乙矢は覚悟を決めたらしく、穢鬼に向かって不比等を庇うように

立った。そこで、不比等は改めて自分の傷を確認する。

血が止まらない。深く、牙で抉られていた。それと同時に、強烈な痛みが全身を駆け巡った。冷静になり、傷を認識したからだろう。だが、不比等は両膝に手を置いて、息を整える事だけ考えた。集中する。あの穢鬼とやらを、殺す。

乙矢は、どう攻めたものかと思案している様子だった。それを傍目に、不比等は疾駆する。乙矢は止めようと声をかけてきたが、無視した。

前肢。両腕が、挟み込むように襲ってくる。それを潜り、不比等は腹の傷を全力で蹴り上げる。

反撃が来るが、この発達した前肢は接近するとそれほどの脅威ではなくなる。どうにか不比等を捉えようと動く穢鬼に合わせて、不比等は立ち回った。

しかし不比等の攻撃は、威力が足りない。仕方がないとは言え、このままでは勝ち目が薄い。どうするか思案しながら、不比等は一度距離を取った。

こちらが何度蹴ったか分からない程だが、乙矢が出てきてからは、一度も攻撃を貰っていない。

慣れて来たな、と不比等は思った。

「不比等、下がりなさい」

声。乙矢の、今までの子供っぽいものではなく、凜とした響きのある声だった。

乙矢は右手を突き出し、何かを放つような仕草をする。

衝撃波。水が割れるように断ち切れ、標的の穢鬼へと眼に見えない何かが奔る。不比等の横を、眼に見えない何かが確かに通り過ぎた。

前肢が、吹き飛んでいた。穢鬼のものだ。不比等の胴回りどころではないそれを、乙矢は何かしらの手段を用いて容易く引き千切った。

「くそっ、外した」

異変を察知した穢鬼が僅かに回避行動を取るのを、不比等は巻き上げられる水の間から見ていた。狙い通りならば、頭を打ち砕いていたのだろう。

走った。打撃の根幹は、回転の力にある。全身を連動させ、回転により攻撃を行うのだ。

深く沈む。身体を大きく回し、軸足を固定しながら不比等は全力で蹴りを放った。上段の後ろ回し蹴りである。

砕くようにして？ぎ取られた穢鬼の腕。その傷に向かってである。穢鬼の身体は僅かに右へと身体を浮かせて、悲鳴を上げた。

まだだ。不比等は思念と共に、再び蹴りを繰り出す。狙いは先と同じ場所である。

背後にいる乙矢。何もしてこないところを見ると、さっきの弾丸には装填時間を要するのだ。再びあれを使えるまで、時間を稼げばいい。

さっきは気付かなかったが、僅かな風の流れがあった。それが、全て乙矢に向かっていて。

穢鬼は、残った右腕で不比等を殺そうともがく。しかし、腕を振り抜いては、その巨軀を支えるものが何もないのだ。顎を打ちつけて、水の中に沈む。

「次は、本当に絶対に見ねえぞ」

不比等の爪先が、穢鬼の残った眼球を打ち砕く。直後、不比等は飛び退いていた。

水が割れる。不可視の兇弾が、穢鬼へと迫る。

四散。肉片が飛び散り、穢鬼の頭部は跡形もなく消え去っていた。頭と左腕を失った巨体が水の中へと伏せて、そのまま動かなくなつた。

沈黙が支配する。水の流れる音ばかりが残り、水路には他に何も音がなかった。

初めて乙矢と会った時を、不比等は思い出した。あの時も確か、雨の音以外に何も聞えなかった。

しかし、状況はまるで違う。不比等は笑い、乙矢は仮面の笑顔を浮かべていない。

これが、本当の姿なのだ。互いに、本当の自分を見せていなかった。不比等はそう思いながら、乙矢へと向き直った。

「なんて、言えいいのかしら」

言いながら、乙矢は静かに歩み寄ってくる。早雲学園の制服姿だった。

丁寧語は苦手だ、と乙矢は言っていた。日本語の手本は母親だとも。これはきつと、その母親の口調を真似て覚えたものなのだろうなどと、不比等は的外れな事を考えた。

「早く、帰って。私にはまだ仕事があるから」

「これがまだいるのか？」

「そうよ」

「海外から、わざわざこんなものを狩るために江甲に来たのか、乙矢」

「多くの質問に答えてる暇はないのよ、早く消えて。巻き込んだ事については、謝るから」

乙矢の視線に含まれる感情が猜疑である事を、不比等は見取った。戦っている時の胸の高鳴りは、不比等の中からとうに消えていた。いつもの自分に戻っていると、今更になって気付く。

ただ、楽しかった。それだけはしっかりと刻み込まれている。この快楽を、何度でも追い求めたい。

「これがお前の言う、招かれないと入れない世界か？」

「そうよ。そして私は、不比等を拒否してる」

「そのようだな」

戦っている最中を顧みる。自分でも、驚くほどの高揚だ。今の心境を考えると、何が起きたのかと自分でさえ疑わしい。

自分はこれと戦ったにいたのだ。強いて言うのであれば、そう信じて疑っていなかった。そしてそれは、今も変わらない。

俺は、穢鬼と戦うために生まれた。

不比等はもう、そう信じる事に決めた。それしかないのだ。そしてこの世界には、乙矢がいなければいまいちどう踏み込んでいいのか分からない。案内が必要だった。

「それじゃ、またね。次に会う時は、あなたが知ってる乙矢響子よ」
待て。そう言う前に、乙矢は背を向けていた。

取りつく島もない。不比等は溜め息をつき、胸ポケットにある煙草に手を伸ばした。しかし、すっかり湿気って吸えたものではない。眼の端。見るともなく、見ていた。黒い影。水の中にあるそれは、ただの影ではない。

「乙矢！」

水。飛沫を上げていた。飛び出してくる異形。さっきの穢鬼と同じ形だ。乙矢の小さな身体に、巨大な顎が食らいつく。

対応する暇などなかった。乙矢が水の中へと引きずり込まれる。

不比等は、水路へと飛び込んでいた。

視界がぼやける。しかし、目標をしっかりと捉えていた。

手。白く小さな手だ。必死で、不比等はそれを掴んだ。胸に食い込む牙は容易には外せない。しかし乙矢は、空いている左手を胸元にやり、眼を瞑っている。

弾けた。また、眼に見えない衝撃波だ。そうとしか言えなかった。穢鬼が水底へと追いやられる。不比等は乙矢を抱きかかえ、どうにか水面へと顔を出し、急いで浅瀬へと担ぎ上げた。

「生きてるか、おい。乙矢！」

傷を手で押さえるようにして、乙矢が踞る。必死で痛みを堪えているのだ。不比等は昔から異様に頑丈であつたが、小柄な少女でしかない乙矢はそうもいかないだろう。

大丈夫、と消え入るような声で乙矢が言った。そして、青ざめる胸元に、鍵がない事に気付いたからか。

何かが弾けた時に、チェーンが切れるのを不比等は見ていた。

「まずい……」

呟きである。しかし、絶望の響きを孕んでいた。それは、ついさ

つきの男達と同じものだ。絶対的な力の前に抵抗する氣力を失った
眩き。

「何がまずいんだ」

乙矢の血は止まらない。白いシャツがあつという間に赤く染まり、
虚ろな眼をしている。

しかしそれはすぐに消えた。眼に光が灯り、ポケットから黒い手
袋を取り出している。それを両手に装着して、乙矢は立ち上がった。
足下が覚束ないようだが、その手袋に何かがあるのは間違いないな
った。

水中。這い上がってくる。穢鬼がちょうど顔を出した瞬間、乙矢
は弱々しい拳を突き出した。

爆発にも似た何かが巻き起こる。ほとんど力も籠っていないよう
な突きにも関わらず、穢鬼は再び水中へと没した。

「早く、逃げなさい。時間稼ぎだから、これ」

「貸せ」

これしかない。不比等は乙矢から手袋を奪い取り、自分で身につ
けた。乙矢の小さな手にフィットしていたかと思えば、不比等の手
にもちゃんとサイズが合う。素材が何かもよく分からなかった。

どういつ効力を持っているのかなど分からない。しかし、乙矢は
得意の武器を失っていると思えた。そして近接格闘ならば、不比等
の領分だ。

乙矢を抱えて、走る。穢鬼が出てくる場所から離れたのだ。二度、
奇襲は通用しないと思えた。

乙矢の軽い身体を下ろして、不比等は来た道を戻った。水中から
這い上がって来た穢鬼が、唸りながらこちらを睨みつけている。

「二回戦、じゃないな」

手を開き、握る。それが合図となり、穢鬼が咆哮と共に突っ込ん
で来た。不比等も雄叫びを上げる。さっきの高揚が、再び戻って来
ている。

いける。なぜか、そう思った。

全身運動。あらゆる箇所の回転、力の伝達。人間の身体はよく出来ているものだ。それによって、信じられないほどの力を生み出す。正面。不比等は拳を突き出し、穢鬼は牙を？く。

ぶつかつた。不比等の拳は確かに穢鬼を捉えた。

次の瞬間、吹き飛んでいた。不比等ではなく穢鬼がだ。体軀からはおよそ想像もつかない展開である。不比等は走り、穢鬼は起き上がろうと足掻く。

駆け寄り、再び拳を叩き込む。今度は力を逃がさないよう、コンクリートの壁と穢鬼の頭を挟んでいた。

衝撃。穢鬼の頭部が、僅かに歪む。不比等はそこから、休む事なく殴り続けた。

奥のコンクリートに罅が入る。穢鬼の頭部は無惨に歪み、拉げ、砕けた。抵抗する暇も与えない。不比等は、笑いながら殴り続けた。壊したい。ただひたすら、壊したい。不比等は殴りながら、自らの内に潜む欲求を探り当てる。

穢鬼が肉片と化した時、不比等はようやく笑うのを止めた。一気に気持ち冷めてくるのだ。まるで、自分が二人いるような感覚だった。

「悪くないな、この感じ」

誰にともなく、呟いた。

踵を返し、小走りに乙矢のところへと戻る。脱力し、壁に背中を預けている乙矢がいた。

「生きてるか、乙矢」

乙矢が小さく頷く。呼吸が浅く、苦しそうな表情をしていた。痛みによるものか、それ以外の何かが原因なのか。

恐らく、血を失いすぎている。普通にしているでもまずい傷だが、水に身体がつかっている事で急速に体力を消耗しているのだ。更に、傷を受けたのが水の中だった。そうになると、血が多く攪われる。

「死なせはしない。あんたは、俺に必要なんだ」

言って、不比等は乙矢を抱え上げた。

驚くほど軽く、細い。このような少女がなぜ、と不比等は思った。同情からではなく、好奇によるものである。

普通の病院はまずい。傷を受けた経緯や状況が説明できず、妙な疑いを受ける可能性がある。行くならば、そういう者でも事情を聞かずに治療してくる医師の下でなければならぬ。

幸い、不比等にはその心当たりがあつた。極道御用達の医者である。彼らならば、金さえ払えばどうにでも治療してくれる。

「当では、あるの？」

弱々しい声で、乙矢が聞いてくる。答えず、不比等は駆け出した。この少女は、やっと見つけた希望なのだ。

穢鬼

眼前に広がる水平線を、乙矢響子はただ眺めていた。

背後には父がいて、母がいる。その更に後方には、多くの兵士が自動小銃を抱えて走り回っていた。

鋼鉄の甲板を踏みしめる。ここが、私の家だ。いつもそう思っていた。海の上に浮かぶ巨大な要塞。この船が私の帰る場所なのだ、と。

不幸だと思つた事はない。偶然、この両親の下に産まれた。自分は普通の子供とは違つと響子はよく理解していたが、それを嘆く気も起さない。

全ては海の上。それで、良いではないか。

突如、船が大きく揺れた。響子は慌てて近くにいた父に手を伸ばす。しかし、届かない。船は炎を吹き出し、傾いていた。

海に投げ出された。死ぬのだろうか。響子は空しく海水を切る両腕を視界に収めながら、そんな事を考えた。

手。掴まれていた。響子の手よりも遥かに大きく、無骨な手だ。しっかりと響子を掴み、決して離そうとしないそれは暖かった。朧げな視界を振り払い、響子はその手を掴み返えそうと力を込める。

「何だよ」

声。降ってきた、という感じだった。ここは水の中だというのに、どうして声が聞こえるのか。

「別に殺そうとも犯そうともしてない。ただ、熱を計ろうと思っただけだ」

「……え？」

屋根があつた。なぜ屋根が、と一瞬考えたが、そこで、響子は初めて自分が水の中にいるのではないと気付いた。

ここは地上だ。自分は、水路と橋の街、江甲に来ているのだ。し

かし詳細な場所まではまったく浮かんで来なかった。

「夢でも見てたか？」

頭痛がした。それに、身体中が痛む。

響子は記憶を手繰り寄せながら、掴んでいる手に引っぱられて起き上がった。

壁の一面を床から屋根まで埋める棚と、これでもかというほど詰め込まれたCD。それ以外には何もない部屋が、そこには広がっていた。空調の効いた六畳間だ。

何となく自分を見下ろすと、自分のものではない大きなシャツを着ている。そしてその内側には、しっかりと包帯が巻かれていた。

「寝惚けてるだろ、乙矢」

さつきから降ってくる声は誰のものなのか。江甲に親しい知り合いはいなかったはずだ、と思いながら響子は顔を声の方へと向けた。

「不比等？」

白いシャツに紺色のベストを重ねて、ネクタイをしている。それに合わせたチノパンが何とも夏らしく、涼しげな印象だった。

「そうだ、刑部不比等だ。ちゃんと覚えてるか？ 自分が何でここにいるか分かるか？ それと、手を離せ」

水の中で掴んだと思った誰かの手は、不比等のものだった。響子はぼんやりとした意識のまま、それを離れた。

離れた不比等の手はそのまま響子の額に触れた。

「気になる事はあるか。例えば、私の服を着替えさせたのは誰だ、とか。私に何する気なんだって、そのまま、俺にビンタの一発でも食らわすか？」

「うーん……」

少しずつ、意識が覚醒してくるのを響子は感じていた。ここにいるのが不比等だとは理解したし、たぶんここは不比等の住居だ。そう考えると、軽口を叩ける程度には余裕も出てくる。

「傷は、ちゃんと治療されてる。しばらくは安静らしいが、死にはしないそうだ」

響子はもう一度、シャツをまくって自分の身体を見つめた。小さい、細い。そう言われ続けている忌々しい身体だ。

確かに、しっかりと包帯が巻き付けられて、引き攣るような感じはあるが傷も出血はしていない。痛みは残っているが、それは仕方がないのだろう。

次に時計を見る。午後一時過ぎといったところか。窓の外は明るく、陽光がまるで実体を持ったかのように降り注いでいる。今日も夏らしい夏だった。

「試しに立ってみる。意識がはつきりしてきたとはいえ、まだ確かめたい事は多いだろ」

言われるがままに、立ち上がろうとした。しかし、痛みでそれを止めてしまう。

やはり、動くのは辛い。せめてもと思いながら、響子は四肢、指と順番に動かしていった。少し凝り固まった感じがあるが、それでも動かないという事はなさそうだ。

もう一度、力を込める。それでどうにか、立ち上がった。不比等は胡座をかいたまま、響子を見上げている。

「うん、いけそうね」

呟きながら、不比等を見下ろす。

不比等は、いつもと変わらなかった。死人のような眼ではなくなっているが、無気力な眼ではある。それでいて、大きな期待を感じさせるのだ。狂気は感じられない。

それで、思い出した。

「不比等、あんたも私と一緒に思いっきり噛みつかれてたわよね…」

「？」

「まあ、そうだな」

「何でそんな平然としてるの」

「昔から丈夫だったからじゃないか」

そんなはずがない。次々と呼び起こされる記憶を、響子は辿った。穢鬼の気配を追って水路に入った。予想と違い、三体の穢鬼を確

認する。一体を始末したところで、残りの二体を見失った。

刹那、耳を突いた狂笑。水路で反響し、どこからともなく聞こえてくる笑い声。人間のそれではない、と確かにあの時は思った。

水路を走り回り、どうにか見つけた。二体目。そこに、不比等はいた。穢鬼に上半身を食われながらも、狂笑と共に眼球を抉り取るうとする、異様な一般人の姿だった。

急いで不比等を牙から解放した。しかし不比等の眼は攻撃を受けた者ではなく、歓喜に身震いする異常者の色をしていた。

徒手空拳で穢鬼に挑む無謀な男。だが、勝負になっていた。それどころか優勢だったと言っている。三体と遭遇した瞬間に響子がつけた腹の傷を巧みに狙いながら、不比等は勝利に猛進していた。

あの時は、猜疑心ばかりが募った。この男は普通じゃない。縁があるとは思っていたが、このような縁ならば必要なかった。後悔さえした。

結果的には、不比等のおかげで狩りは早く済んだと言える。不比等が前衛を務めてくれたおかげで、響子はゆっくりと力を蓄える事が出来たのだ。

確か、水がいきなり跳ね上がった。穢鬼に食いつかれたのだ。あの瞬間から、記憶が途切れている。断片的には思い出せるが、どうにもすっかり繋がらなかった。ただ、水に沈んだ響子を不比等が助けてくれた事だけは、間違いなく覚えている。

「不比等、あんた」

「命の恩人だ、なんて言うつもりはない」

「違う、そんな事じゃない」

お前は、何者なのだ。

何故、穢鬼を見た時に狂ったように笑っていた。何故、あれだけの傷を負って平然としていられる。何故、私を助けた。

次々と湧き起こる思念。どれから投げつけるべきなのかさえ、分からない。分からない事だらけだった。

「俺は、あんたを怒らせるような事はしてないつもりだ、乙矢」

「そう、そうね。その通りよ」

確かに、不比等に対して響子が怒る理由は何もなかった。命さえ助けられているのだ。

だが、何かが釈然としない。傷をものともしていないところと、穢鬼を平然と受け入れているところ。この二つが、特に理解できなかった。

「分からない」

「何が？」

「あなたという人間が」

「そうか？ まあ俺も、乙矢響子の事はあまり知らないな」

「知らないんじゃないくて、分からない」

不比等が首を傾げる。そして、そのまま立ち上がった。

「昼飯でも買ってくる」

言いながら、不比等は車のキーを片手にふらりと部屋を出て行く。呼び止める暇さえなかった。

上手くはぐらかされたな、と響子は思った。しかしこれでいいという気もする。再び現れた猜疑心のせいで、不比等に謂れのない罵倒を浴びせてしまうところだった。

今は、互いに分からない事だらけなのだ。響子は自分にそう言い聞かせながら、響子は眼を落とした。

前々回、前回。二度会った時に着ていた白いワイシャツ。今自分が着ているのは、あの時と同じデザインのものだ。

不比等は同じような服を着回すタイプなのかもしれない。そんなどうでもいい事で、響子は少しだけ落ち着いた気がした。

冷蔵庫の中にあつたミネラルウォーターを勝手に拝借し、口をつけた。冷たい水が心地良い。

傷の痛みは消えなかった。あまり長く歩く事もできないだろう。しかし、家の中を往復する事さえ難儀する程でもない。

昼飯を買ってくる、と言って不比等は姿を消した。頭を整理する時間をくれたのだろう、と響子は思った。布団の上に腰を降ろし、膝を抱える。

不比等と初めて会った時は、本当に驚いた。

まさか、民家もない一帯の廃棄されたバス停に、暢気に座っている男がいるとは思わなかったのだ。

あの時、響子は仕事を終えて帰るところだった。仕事は、昨夜の異形の怪物——穢鬼の狩りである。あのバス停の背後に広がる雑木林。その中にある山荘に、穢鬼を見つけたのだ。

最初は同業者かと思った。しかし、一目見れば不比等がただ雨宿りをしているのだとは分かったし、そこまで疑いは持たなかった。

強いて言うのであれば、死人のような男だと思った。眼にまつたく光がないのだ。自棄とも自失とも違う、不思議な無気力だった。だから不比等の事を幽霊と称した。

不比等に疑念を抱いたのは、翌日だった。響子が転入手続きを済ませて通っている早雲学園の校門前で、不比等と出会ったのだ。

あの時の不比等は、もう死人の眼はしていなかった。無気力なのは変わらない。しかし、何かを期待していた。それが人生の全てだと言わんばかりの、静かながら激しい炎を燃やしていた。

失踪した、黒神姫乃という少女の搜索。不比等が携えていた仕事はそういうものだった。姫乃の父親は極道で、不比等はその筋から頼まれたのだと言った。

それが不比等に光を点したのだとはすぐに分かった。しかし、響子からすればそれが何だというのかという気持ちのほうが強い。見ず知らずの少女の失踪で、どうして胸を躍らせるのか。

江甲に来たばかりで、早雲学園にも転入して間もない。そんな響子が、不比等の捜査の役に立つとは思えなかった。友達もそれほどできていないのだ。

それから、三日ほど会わずに過ごした。そして、昨夜の出来事だ。また、不比等は変わっていた。会う度にあの男は眼の色を変える。最後の色は、狂気であり歓喜だ。

「なんなのよ……」

分からない事が何よりも怖い。それが人間なのだ。響子には、不比等が分からなかった。危険が大きくなればなるほど、あの男は眼を輝かせ、大いに笑う。

間違はなく、狂人だ。しかし、不思議な事に響子にはどこことなく優しかった。それがまた、解せない。

「こんな縁なら」

いらなかった。そこまでは、口に出せなかった。

江甲という土地に来てまだ慣れない。日本に来たのは三年前の話だが、その間はずっと東京で過ごしていた。

見知らぬ土地、見知らぬ人々。そこで穢鬼を狩る仕事に就く。それは少しずつだが、確実に響子の内に寂しさを募らせた。師と会えない事がそうさせているのだ。

自分一人で判断するという事がこれほどまでに孤独なものだとは、響子は思っていなかった。師の背中を守る事こそが使命だと、信じて疑っていなかったのだ。

師は、乙矢響子という命を背負いながら指示を出し続けた。それは今の響子よりも、負担が大きいはずだ。そんな事を、一人になって初めて知った。

支えとは言わない。ただ、学校で安穩と生きている自分とは少し違う自分。それを知っていてくれる人間が、一人欲しかったのだ。

だから、不比等とベンチで出会った時に話しかけた。何となくあの出会いとは特別な気がして、群雲鏡に聞かれても答えなかった。

冷静になると、自分の感傷の大きさに驚く。しかし、これが自分

だという気もした。どんな仕事をしていようと、寂しさも、悲しさも、人の心を持っている。

不比等からは、それが感じられない。

「部屋の真中で一人体育座りつて、どうなんだ」

声に驚いて、少し身体が跳ねた。

「何を驚いてんだよ」

不比等が、ビニール袋を二つ抱えたまま部屋の入り口に立っていた。物思いに耽っていたせいか、帰ってきた事にもまるで気付けなかった。

「悪いんだが、俺は料理とか一切やった事がない。適当な弁当とかジュースを買ってきたから、好きなの選んでくれ。食いたくなくても食わなくてもいい」

昨夜の狂笑が嘘のように、不比等は穏やかな表情をしている。こうしていれば、ただの大学生にしか見えない男だった。それほど大柄ではないが、背が高いのが唯一の特徴だろうか。

不比等が四つ足の机の上にビニール袋を置き、無造作に缶を取り出した。響子もビニール袋の中を覗き込む。

「……これ」

「俺の知り合いの外国育ちが悉く好きなもんでな。すげえ勢いで食うもんだから、あんたもそうなのかと」

いわゆる、チューイングソフトキャンディというやつだ。食感はガムに近いが、飲み下す事が前提に作られているお菓子である。

響子も例に漏れず、日本という国の食べ物の美味しさには感動した。味付けの量というか、程度をよく知っていると思えたのだ。

そんな中でも、日本のお菓子はすごい。大抵のものは驚くほど美味しく、特にチョコレートの類とチューイングソフトキャンディは最高の食べ物だと響子は思っている。

「私も、外国人なのかしら」

「味覚はそうじゃないか」

「日本に来て三年が経つけど」

「俺は二十二年だな」

「最初からいたんでしょ」

ソフトキャンディの封を切りながら、そういえば不比等の年齢を初めて知ったな、と響子は思った。

同年だとは考えていなかったが、思っていたよりも年上だった。響子よりも五年早く生まれているのだ。

「ねえ不比等、私の服は？」

「洗濯して、今乾かしてる」

体中に包帯が巻かれているが、下着以外に身につけているのはワイシャツだけだった。起伏の少なく、全体的に小さくまとまってしまった自分の身体が今だけはありがたい。不比等の服はそれほど大きかった。

「ここでは一人暮らし？」

「そうだな。俺は友達なんていねえから、誰か来る心配もない。あんたがそんな格好でも見るのは俺だけだよ」

「別にそんな事を気にしてるわけじゃないんだけど」

「そうか。それで、乙矢は家に帰らなくて大丈夫なのか」

「家なんてないわよ。ビジネスホテルの部屋をずっと借りてるから江甲に来て、まだ一週間と少ししか経っていなかった。住居の当てはあるが、そこまで話を進められていないのだ。

「事情はよく知らないが、苦労してるんだな」

「そうでもない、と私は思ってるけど」

コンビニで買ってきたと思しき弁当を口に運ぶ不比等は、乙矢の方に一度も視線を向けない。

響子は、もう一度部屋を見渡した。不比等は、喋る事がなければ喋ろうともしない人間だと思えたのだ。今話す事は何もないとばかりに、不比等は弁当を食べている。

「この部屋、コンポはないの？」

気付いた事が一つあった。クラシック、ロック、ジャズ、プログレ。あらゆるジャンルのCDが数え切れないほど棚に詰め込まれて

いるというのに、それを再生する機器が見当たらないのだ。

「音楽は聴かないんだ」

「じゃあこのCDの山は何よ」

「飾りだ。それも、金のかかった飾りだな」

いまいち言っている事が分からない。不比等は相変わらず、響子には眼もくれなかった。

気を遣わせているのかもしれない。ふと、そう思った。

「不比等、私の服を持ってきてくれる？」

「ああ、分かった」

箸を置き、不比等が部屋を出て行く。水を勝手に飲んだ時に見たが、洗濯機や冷蔵庫などは全て廊下のほうに並んでいるようだ。不比等が、綺麗に折り畳まれた制服を持って現れる。白いシャツと赤いチエックのスカートである。響子の私物も全て、一緒だった。「ありがと」

痛みを堪えながらさっさと服を着込み、不比等を盗み見る。

どうにも、気を遣っていたわけではないらしい。響子がいるのも関係ないとばかりに、寝そべっていた。本当に、ただ見ていなかっただけらしい。

何となく釈然としないが、響子は大人しく腰を下ろした。

「退屈な部屋ね」

「怪我人が何言ってたんだ。病院はもつと退屈だぞ」

不比等に対して、響子はもう笑顔は浮かべなくなっていた。浮かべる必要がなくなったというよりは、浮かべても無駄な関係になったのだ。

これからどうするべきか。響子は束の間考えて、壁に背中を預けた。

武器を一つ、失った。響子が長年愛用していたものである。水路に引きずり込まれた時に、チェーンが炸裂の衝撃に絶え切れなかった。その前に、牙などで傷つけられたのだろう。

あの古びた鍵が、響子の全てだった。あれがなければただの女子

高生とさほど変わらない、無力な人間となる。

やはり、鍵を探さねばならない。しかしその間に、もし戦う事を強いられたらどうすればいいのか。どうすれば凌ぐ事が出来るのか。刑部不比等。視線を少しくれた。この男ならあるいは、と思う。

徒手空拳で、初見の怪物を相手に一步も引かずに渡り合った。喧嘩が強いとかそういう次元ではなく、戦うという事を知っているのだ。それほどの苛烈な思考がどうやって育ったのかは知らない。武器の有無はともかく、これだけ肝が据わっている者ならば戦場で頼れる存在となり得る。

しかし、それでいいのか。まったく関係のない人間を、このような事に巻き込んでもいいのか。

「不比等？」

「なんだ」

「どうして、何も言わないの？ 聞きたい事はいっぱいあると思うんだけど」

「聞いたら答えるか？」

不比等が上体を起こしながら言う。

むしろ、なぜ聞かないのかが響子にとっては不思議でならなかった。詳細はどうでもいいとばかりに、不比等は穢鬼に興味を示さない。ただ受け入れているのだ。

「知ってる限りは、話すしかないでしょ」

「守秘義務は？」

「特に定められてない、かしら」

というより、言っても信じない者の方が圧倒的に多い。だから響子も言わない。それだけだった。同業者達も似たようなものだろう。異形の怪物に水路で追い回されたと言って、誰が本気で信じるというのか。せいぜい噂や都市伝説として語られる程度である。

「仕事の通称は？」

「落とし屋、って言われてるわね。聞いた事あるの？」

「いや、あるかと思ったんだが、ねえな」

穢れた鬼と書いて、穢鬼と読む。その穢れを落とす者。そういう意味で、穢鬼と対する者達は落とし屋と呼ばれていた。誰がつけた呼び名なのかなど、響子は知らない。

「要は、私達は祓師なのよ。穢鬼は俗に言う心靈現象と解釈してもいい。悪霊や悪魔とも言い換えられるわね」

「悪霊に悪魔、ね」

初めて会った時、不比等は幽霊を信じていると断言していた。

火のない所に煙は立たない。この言葉に全てが集約されるような論だった。不比等は、「ないと否定するには数が多すぎる」と言ったのだ。

それは間違っていない、と響子は思った。確かに、数が多すぎるのだ。

日本に限らず、世界中にその手の話はある。民間伝承や土着信仰など、数え上げれば膨大なものになるだろう。

冷静に考えればそれらほとんどの超常を、大半の人間は詳しくは知らない。見た事などないし、触れた事もない。しかし心のどこかに、いるという思いを持っているのだ。

言うまでもなく、現代においてはそのような者達は存在せず、昔の人々の呪術的思考の産物に過ぎない。これが世論である。

実際そうであれば誰も苦勞はしない、と響子は思っていた。

日本は豊かな国だった。そして、比較的信仰心の薄い者が多い。かつてはこの国も戦を繰り返していたが、今、日本という国は殺し殺されという事から、少なくとも大半の国民は遠退いている。

危機感がない。超常を信じる心がなく、命の危険も知らない。それ故に、日本で超常と対する者達はより潜行する事となるのだ。だから世間には認知されない。表社会には決して出ない。

混乱や戦乱に対する耐性をまるで持ち合わせておらず、超常を知らないとなると、響子のような職業は絶対に受け入れられないものとなる。目の当たりにすれば、響子が考えるより遥か上のパニックが起きる。

上に立つ人間が認知していればいい。いつしか、そういう暗黙の了解が出来上がっていたのだ。そして、落とし屋は暗闘を強いられる。

昔はそうでもなかったのだろう。今で言う迷信深さだが、つまり耐性を日本人も持っていたのだ。医者が祈祷師であつたり、戦の吉兆を占いで決めたりなど、良い例だろう。

「穢鬼つてのは、何だ？」

「穢鬼は文字の通り、穢れた鬼。鬼っていうのは誰もが想像するあの赤い鬼じゃなくて、超常という意味での鬼よ。語源に近い。穢鬼は悪性の超常と言えるわね」

「あれは、人を殺すのか？」

「いいえ、食らうのよ。人が人である所以を食らう。魂、とでも言えればわかりやすい？」

古来より存在した悪魔や悪霊と呼ばれる、人に害を成す超常。それが穢鬼だった。悪魔や悪霊と呼称しないのは、区別するためだった。穢鬼と言え、大抵の人間には通じない。しかし同業者には通じるのだ。

「最初から見える者と、何かのきっかけで見えるようになるものがある。本質的には幽霊つてやつと同じだからね。靈感のあるなしで決まる」

「俺は、最初から見えていた」

「才能があつたつて事ね。今までそういう体験は一度もなかったの？」

「あつたのか、なかったのか……よく知らねえな」

生まれた時から当たり前に見えているものに疑問を抱けという方が難しいのかもしれない、と響子は思った。

ただ、必ずどこかで気付くはずだ。子供は学校という小さな社会で、他人と接する。そこで他者と自らの比較は行はずなのだ。

「人間は、本能的に危険を察知するものよ。何となくいつのも道が怖い。何となくこの先は危ない気がする。それだつて靈感だから。」

ただそれが強いかわいさの差で、皆持つてるものではある」

「そういう所には穢鬼が潜んでるのか」

「必ずしもそうとは限らないわよ。けど、足をどうしても踏み出せない時とか、無意識に道を変えて歩いてる時とか、一度は誰でも経験してると思う。そうやって、人は危機を回避するの」

人は闇を恐れる。何も見えなくなるからだ。そして穢鬼もまた、普通は見えない存在。それは闇そのものとも言い換える事が出来る、根源的な恐怖である。だからこそ、人は意識せずとも闇を避けようとする。

「危ないのは心が弱った人間。判断力や感覚が鈍ってる時。そういう人間は、危機回避が遅れて踏み込んでしまう。決して行つてはならない道を進んでしまう」

「そして、魂とやらを食われる？」

「その認識でいいわよ」

不比等が、少しだけ考えるような仕草を見せた。

「そうやって死んだ人間がいたとして、死体はどうなる。二十二年、俺は江甲にいる。だがそういう変死体なんて話は聞いた事がねえ」

もっともな疑問だった。不比等は穢鬼に食いつかれて怪我を負っている。だからこそ、このような傷を受けた死体が拳がれば必ず変死体として話題になるはず、と考えているのだ。

「不比等、日本という国で年間三万人以上の人間が死ぬ原因って、知ってる？」

「自殺だ」

「そう、それよ。世間的に自殺は、心労などを抱えて心が弱った人間の末路、として考えられているのは分かるわよね。実際にどうかはともかく」

不比等が少しだけ頷いた。

「つまり、穢鬼による死者は日本では自殺者として処理されている。実際、裁こうにも相手がいないしどうしようもないのよ」

そして、増加傾向にある自殺者の数。不比等もそこに思い至った

のか、無気力な眼に少しだけ光を見せた。

「穢鬼の数が、増えている？」

「その通りよ。急激な穢鬼の増加が、自殺者の増加と重なってるの。そりゃ、普通に自殺してる人間も増えてるんだとは思っわよ。けどそれよりも、穢鬼によるもののほうが大きいと聞いてるわ」

穢鬼の増加の原因は不明。

ただ、穢鬼は元来の悪霊と本質的には変わらない超常である。人の感情は時として肉体を超越する。

「穢鬼つてのは、元は人なんだよな。いわゆる幽霊なんだから。まあ動物霊とかもいるって言うが、今は抜きだ」

「まあ、そうよ」

「何で、人を襲う？」

「さあ。それが分かれれば誰も苦労してないわよ。実際、幽霊を退治する人間はいても、幽霊が本当は何であるのかを細かく言い当てた人間はこの世にいないのよ。人魂、霊魂、言葉は色々あるけどね」
魂が何であるのかも詳しくは分からない。人は科学によって様々な分析を可能とするが、その科学が通用せずに現在まで語り続けられるのが心霊であり超常なのだ。

人は超常を分析する術を持たない。しかし太古から、対決だけは行える人間がいた。つまり人は、この側面に関しては一千年、二千年経とうが何一つとして進歩していない。原始的に、戦い、殺す。それだけで成り立つ世界だ。

「数字よりも、人の心よ。複雑で、生者の数だけ形がある。それを全て調べ尽くす事が出来れば、もしかしたら何か分かるかもしれないけど」

「無理な話だな」

「そう。そしてそれは、私の仕事でもない」

大体は説明し尽くした。不比等も納得したようで、一息つくように煙草に火を点している。

「大体理解した？」

「とりあえず覚えた、って感じだな」

不比等はぼんやりした瞳を虚空に投げていた。煙を見ているのか、それとも何も見ていないのか。

「どうして、乙矢は落とし屋に？」

「どうして……？」

專業の落とし屋というのは、もちろんいる。坊主や神父とは違う、闇の被師なのだ。それぞれに武器を持ち、穢鬼を狩る。

ただ響子は、專業の落とし屋ではなかった。というより、專業するつもりがない。どちらかというと、この世界との繋がりが必要であつたがために、派遣されている立場だつた。

しかしこれは、容易く人に漏らしていい内容ではなかった。不比等もそれを察したのか「言えないならいい」と呟くように言う。

「あんたにも、色々と裏がありそうだな、乙矢」

「不比等もね。それに、人間生きてれば、言えない事の二つや二つくらいあるものね」

超常が何であるかなど、響子にとっては些事に過ぎないのだ。自分が必要としているのはそのような情報ではない。それは協会が必死で考えればいい、と思っている。

一応は響子も協会に名を連ねているが、それはあくまで末端の会員としてに過ぎない。

「しかし、乙矢は江甲育ちどころか初めて来てるんだよな。何でまた、この江甲で落とし屋を始めるんだ？」

「ああ、それなら簡単な話よ。この土地の被師を総括する一族があるの。江甲は今までもずっと、その一族だけの力で守ってきた。けどそれが、とうとう難しくなってきたらしいのよ。穢鬼の数が増えてるからね。だから外部の人間が招集されていて、今は試用期間つてところなのよ。私も働きが認められれば、正式な落とし屋として江甲に根付く事になるわね」

就職活動みたいなもんか、と不比等が呟き、煙を吐き出す。
確かにそうかもしれない。この試用期間で、如何に多くの穢鬼を

駆け出すかが勝負なのだった。現在は、不比等と合力したのも入れて四体である。多いのか少ないのかは、自分でも分からない。他の落とし屋の顔も名も知らされてはいないのだ。当然、実績も知る事はできない。

「長々と説明させて悪かったな。ところで、話は変わるんだが」

「なに？」

「あんたの私物がどうか分からなくて捨てるか捨てまいか迷ったんだが、この割れた石は何だ？ ポケットに入ってたんだが」

割れた石。

言葉を聞いた瞬間、響子は目の前で白むのを感じた。

「いつ、割れたの？」

なるべく平静を装って、響子は聞き返した。焦ったところで、どうにもならない。ならば焦るだけ無駄だ。

「さあ。気付いたらもう、割れてたからな。なんだ、大事なものだったか？」

不比等から、子供でも掌に収められるような小石を受け取る。表面には細々と文字が描かれているが、響子には読めない。

確かに、真中から綺麗に割れていた。

顔が浮かんだ。転校初日、少なからず緊張していた響子に、声をかけてくれた少女。顔色は悪く眼も落ち着かない少女だったが、それでも転校生を一人にさせまいと気遣ってくれた。

立ち上がった。傷は痛むが、そんな事を気にしている余裕はない。ローファーに足をつっ込み、痛みを堪えて外へと駆け出す。夏の暑さが一気にのしかかってくるが、それも撥ね除けようとした。

学校に向かうべきか。それとも、家か。しかし家の場所は知らない。携帯電話を取り出したが、昨夜の水のせいで壊れているようだった。

「乙矢」

不比等が、後を追って来ていた。

「あんたはサポートしてくれ」

「でもっ」

「いいから。俺は、俺なりに鏡を助けない」

違う、鏡を助けたいわけではない。この男はただ、自分が楽しみたいだけなのだ。

束の間、憎悪にも似た感情が乙矢の心を塗り潰した。しかし、傷を抱えて武器も持たない自分だけで、鏡を救う事が出来るのか。

今は、不比等に頼るしかない。口の端を歪め、狂気を孕んだ眼光を持つこの男に、寄りかかるしかないのだ。

「……道中、説明はする。とにかく今は、鏡を探すわよ」
「了解だ」

歩こうとすると、不比等に軽々と担ぎ上げられた。車に連れて行ってくれるのだろう。最初は驚いたが、すぐに抵抗を止めた。

響子は、鏡に小石を一つ渡していた。お守りと言っただ。それは穢鬼の接近によって割れるもので、子の石が割れると親の石も割れる仕組みになっている。

群雲鏡と最初に会った時から穢鬼との関わりがある事を、響子は見て取っていた。だからこの石を渡したのだ。

無事で。祈っても無駄なのは分かっているが、今の響子に出来る事はそれだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4184y/>

千なる彼方が六の鬼

2011年12月2日18時47分発行